

た。

あまりの空襲の激しさに氣も動転して昼食をとることもわすれ、一日ぼうぜんとして過した。それでも私のところは家族が少くて比較的、良い方であった。家族の多い人々の苦勞や心配は言葉では言いあらわせない。

(避難小屋の状況)

小屋はカヤでふいてあり、床は曲りくねった丸木を組み合わせてつくられていた。板材は勿論使用出来ないのでみんなありあわせの山切り出しの直径十センチほどの丸太でつくられていた。

私の班は四町内の一班で、七家族一緒に生活することになった。

部屋を三か所に分けて使つた。

長家造りで十坪程の小屋に、二十四、五人の人々が寝起きするので、もうそれは大変な事でした。丸太の上にゴザをしいただけで寝るので腰が痛くて寝つかれない日々が幾日も続いた。浜元のじいさんは避難の恐怖や、つかれからでしよう、避難してきた翌日には死んでしまった。隣の人も死んでも、自分の身の保全をすることがせいいっぱいで涙ひとつ落せないほど人々の精神はいびつになっていた。又避難小屋の片方の山の斜面が焼きはらわれて、敵に見つかると大変だということで、川のふちから薬のついたままの木を切り出して偽装をすることなどいろいろ苦心した。

私たち四町内一班は山のふもとでしたが、一町内二町内は頂上近くで、ひどいところでした。

避難先での食糧については、もっぱら夜間部落にある自分の畠までいって「イモ」を掘りまだ夜の明けないうちに又白水に帰えつて

くるというのが日課でした。昼間は物音一つたてずに山中で息をころして生活し、夜になると部落へ出かけてゆく。戦争ならではみられない生活風景であった。

川良山は午後五時にならないと通してくれないし、また朝は日が昇ると通してくれないという具合で兵隊もこわかった。

一度はこういうこともあった。私が食糧をとりに部落へいつて、その夜のうちに「イモ」を掘り、一泊して朝、自宅で白水にいく準備をしているところへ兵隊が来て、どうして部落にいるんだ!何をしているんだ!と高圧的に質問してくるんです。私が避難小屋から食糧をとりに来て今帰るところです、と答えると、兵隊は「今すぐ帰れ」と銃を私に向けて、「早く帰れ」「早く帰れ」とわめき、おどすのです。兵隊二、三人が銃を向けておどすので、こわかった。やっとのことで避難小屋へ帰った。兵隊は何の目的かは知らないが、いつもこうして部落内を見廻っていたようです。私は、もうこれで二度と部落へは帰れないのかなー、と思つた。

一度はタキバル(部落後方にある地名)の畠で昼間イモを掘つているとき、空襲にあい、畠の中でとっさにかくれるところもなく、あぜのカヤの中にかくれてどうやら難をのがれた。爆弾を投下する際の恐怖は今考えてもおそろしくあの時は幾度も死を意識した。今死なされるのではないか、今日は死ぬではないのかと。

それでも、避難する前に役所から米が一人三升程度配給があり、避難中は畠に行つてもイモがあったし、何とか生活出来たが、戦後はたいへんであった。畠の作物も、たくわえも避難中にみんな食いつぶし、もう何もなかつた。

ハイガーランドのところまできたときに東からグラマンがゴウゴウと音をたてて飛んでくるではないか。

車の運転の兵隊はまつ先に逃げ出していました。車に乗つていた人々も、私の子供達もみなどこへ逃げたかわからない。私は祖母に、「ンミースカタナラナー、ワーヤメ、ウマカラ、ウゴンナヨー」—(ばあちゃん、あなたはこの年でトラックから飛びおりることも出来ない、飛行機はもうそばまで来ているのでしかたないので、そのままそこでジッとしていて下さい、動かないで下さいよ)といつて祖母をトラックに残したまま飛びおりて末の娘をつれて田のあぜに身をよせかくれました。銃撃をしながら飛行機は飛び去つたのです。トラックの祖母はどうなつたのか、子供達はどうしたのかと心配しながら田のあぜからトラックへ走りよつたら、祖母は無事でトラックの上にうづくまつっていました。子供たちはどうるとどこにも姿がみえません。心配していると、カタバルの川のほうから一人又一人とほい出してくるのです。ああ、皆んな生命があつた。助かつたと初めて胸をなでおろしました。

やつとのことで祖母をかかえて山城興常さんの畠小屋のところまでやつてきたが祖母は年も八十四歳を越しているし、今の空襲で精神的にまといつて足腰がたたなくなつてもう歩けないと言うのです。しかたないので、子供達はそこに残して「おまえたちはここ(山城さんの防空壕)にかくれてまつていなさいよ」といつて、もし空襲がないようだつたら少しずつ歩いてきなさい。お母さんはンメー(祖母のこと)をおんぶして避難小屋まで案内してくるからと話し

て祖母を背負つて歩きはじめました。しばらくぐくとハイガーランドの朝食をする時間もなく、米の一升を風呂敷に包み、子供達に背のうを背負わせ祖母をおぶつて桃林寺の前でトラックに乗つた。

朝食をする時間もなく、米の一升を風呂敷に包み、子供達に背のうを背負わせ祖母をおぶつて桃林寺の前でトラックに乗つた。

たもとで山口町長がバンジロー木のそばで死亡していました。

祖母を背負ったが、子供を背負うのとちがって容易じゃない。手で祖母のしりをかかえこむようにして歩いた。やつとの思いでウラース（地名）の所まで来たが、その途中ウラース橋の近くでトラックが炎上し平良のばあさんと仲吉のじいさんが銃撃されて死亡し、道路のそばに着物をかぶして横たえている。道行く人は誰もそれどころではないという態度で通りすぎていきました。苦しいのか、悲しいのか耐えがたい思いが胸につかえて涙も落ちなかつた。口だけが大きく開いて「アーアーアー」と声をだしているだけだった。背中の祖母も「ほんとにおまえには苦勞をかけるね、孫のおまえにこんな思いをさせて、自分はもうお前のばちがあたりそうだ」といつては泣き泣きするのでした。ようやくの思いで避難先の白水入口までたどりつきました。そこは登野城の避難所であります。ようやく大川の避難所はそれから坂道に入り、山の中腹にあるのです。ようやく大川の避難小屋に祖母をおろし「子供達をつれてくるからそこで横になつて下さいね」と言つて、わたくしはまた引き返しました。末娘がゆうべから、はき下しをしているので何か食べさせてやらないと身体がもつまいと思い、下山の途中で避難小屋を廻つて「どうか、あなたのもつている食糧で汁でもよいし、ゴハンでもよい、例えおじやでもよいから、何でも、あつたらどうか少しでも自分のためにめぐんで下さい」と頼み歩いて少しのオニギリをもらい道を急いだが、行けども行けども子供達とは会えません。ハーアーこれははき下しをしている娘がどうかしたのかも知れない、と心もはり

さけんばかりに心配して山城さんの防空壕までくると、子供達は皆ここですわりこんでいるのです。
子供がいうには「ヨー、ミナコーキー、モウスコシデ死ヌトコロデアッタヨー、色モアオクシテ、目モヒカッテ、息モスコシガシテイタヨー」と話すのです。

私はミナ子をだいて「少し元気を出して、とにかくこのオニギリを食べなさい、お腹の中に何もなくては、もつと大変だからね」と、そばにいた子供達にものオニギリをわけて食べさせ休みながらミナ子をおぶって子供達には、トラックに積んできた荷物を分担させてかつがせ、白水にむかいました。しばらく行くと、兵隊がいて、「この道は通つてはいけないので名残御獄のそばを廻つてゆけ」というのです。しゃくでしようがなかつたが、兵隊の言うことですので反抗することも出来ず、遠廻りをしながら雑木や水田の中をわけ入つて名残御獄の道に出、白水へ行つたのです。白水へ着いた時はもう日も暮れかかっていました。

私は、空腹そのものは何も恐いとは思わなかつた。ただ大勢の家族をかかえているので食糧のことだけが心配で又それ以外に物事を考えるゆとりもなかつた。家族の中で食糧を調達したり働くことが出来たのは私一人であつたからです。せめてお父さんが側におればと思うんだけど、男はみな徴兵としてかりだされているし、その時の苦しみは、言い表わすことは出来ません。

それからは毎日午前の二時になると白水をぬけ出して部落まで食糧の調達に出来ます。部落へつくのが四時頃で、それからカンヅメの空罐をなべがわりにして、かまどをつくり火が外部にもれないよう

にしながり食事を準備するのです。遠くは大浜部落、平得部落の畠小屋を廻りイモを十斤とか二十斤というふうに買いあつめ午後八時になるとそれをかついで白水へ帰る、白水につくのが十時すぎである。そういう日課でした。

子供達はまだ思慮分別がつかないので、朝出かける前にその日一日分とたいておいた食糧も一度にみんな食べてしまつて何も残さないという状態でした。つかれきった身体で空腹をがまんしながら夜の明けるのをまつ毎日でありました。

避難小屋で、私の家族にあてがわれた場所はゴザ三枚ほどのせまい片すみで、七人余の家族が寝なければならぬ。私の寝場所など、あらうはずもなかつた。子供達の頭上でひざをまげて仮寝をするのでさえやつとでありました。

時々食糧の調達がはからず夜ふけに帰つてくる時などは、皆んな寝しきまっているのに私が寝る場所もなくやりきれなくなつて小屋の前にすわりこんで「なんでこんな思いをするまで戦争にいじめられて苦労しなければならないのか、いつの日かまた平和な世をむかえる日がやつてくるときもあるだろうか」とカヌンシャー歌（トバラーマ）を歌つて自分をなぐさめたこともあつた。となりの小屋からも同じ思いをしている人がおきだしてきてともになぐさめ歌うのでした。

食糧はいつも二日分程のたくわえを残しておかないと私の身に万一つことがあつた場合は大変なことになるので、すこしでも休むわけにはいかなかつたんです。

年老いた祖母のめんどうを見るひまもないでの、私はいつも祖母

に「あなたは今こんなところで死んだら葬式はおろか何もしてやれない、遺体をそのままここに放置しておくよりしかたがない。どうか気をしつかりもつて生きながらえて下さい。家にさえ生きて帰ることが出来れば、いつ死んでも人の道にあうような葬式をしてあげますからね」と言いきかせてはげました。そんな生活を毎日くりかえしているうちに、避難を解除され帰つてもよいということになつたので、祖母をアウグ（もつこ）にのせ、兵役から病氣で帰つてきた息子（長男）の信八と隣りのおじの二人でかつて家に帰りました。一家みんな無事に家にたどりつくことが出来たけど、ほんとにたいへんなのは、これらの食糧難でした。

避難先からはみな部落に帰つてくる。避難中は、畑に作物を植えることも出来ないので、あるだけみんな取りつくして、何も残つてない。よしんば、畑に作物のある人々でもほとんどがマラリアに

おかされて収かくをすることが出来ない状態でした。

私はまだ茹りとりのしていい水田に山かけては、一日中農作業の手伝いをして一升の米をいただいてくるとか、大浜部落の人々の避難先ナ一山に山かけてはその畑仕事をしてはオイモ十斤いただいてくるとか、また薬畑から茹りばぎ（畑主が病氣で茹手がいいので自分がそれを茹りとつて、そのうちの一升か二升茹付としてもらう）をしたり又かいし（イモ畑の収穫をしたあとさらに耕やすてやつて残つてあるイモをもらう）をしたり、しながら生活をしなければならない状態においてしまつた。

そのうち私が栄養失調と過労で病にたおれてしまつたので子供たちはよその田のマタマイ（一度刈り終えた稲は耕さずにそのまま

放置しておくと同じ株から少量の穂をつける、それをマタマイといふ）をみんなで歟取つて食糧を手に入れる。

それを祖父と祖母は、ニカフク（米を天日に乾燥させるためにワラ（あんだムシロ状のカバー）に広げてほし、ゴミやモミガラを取り除くと、子供達はこれをウスでついて白米にして食べる、というようなことをしなければならなかつた。

又当時キヤッサバの粉の配給があつたのでそれを糊にたいて栄養だということで子供たちや病人に椀の一杯ずつ食べさせたり、米ぬかを買い求めてそれを五合ずつ布でしばりナベの中でも洗いしその汁を炊くと少し固まるのでそれを食べたり、さつまいものあるときはたいへんのちごうでその汁の初の一升目は親指大のいも二個浮べて、二度目はいもの葉をまぜて、いも一個、三度目からはいもの葉だけをその汁に炊いて食べるといったふうでした。

ソテツを食べるときは勿論実が主要ですがその実もないときは幹を食べました。幹を食するときは、まず皮をはぎ、そのなかみをカシナ等で削りとり水につけてしばらくおいてから、乾燥させ、それをウスでひいて粉にして食べました。粘り気はなくサラサラして、とても食べられるようなものではなかつたのですが、しかし食べなければ死んでしまうので目をつけたまま食べました。さつまいものある人は、その粉をつけて食べてました。

とにかく手当り次第何でも食べたが、食油がなくて困りました。それで潤滑油（オイル）を食油代りにして、いためものは何にでもそれを使つた。

特にスマル（モズク）のチャンプルーに使用するときは食べにく

糧を金で売つてくれる人もいません。みんな物々交換でした。

私のもつてているあるだけの着物も食糧に変わつてしまつました。例えばだいじにしていた宮古タンジーとソテツの実を一斗籠の一個分、というようにして交換しました。そのとき一番大事にしていた久米島上布もわずかの食糧にばけました。私のもつ物の目ぼしいものはみんな食糧に変えてしまい着るものが多くなると、自分で山に入り織維のとれる木をきり出して早朝のひとつを利用して織機にかけて織りあげ、染料のクール（赤にそめる）を山からみつけてきてこれで染めあげ、水田につけて茶の色を出したり黒にそめたりして、これ一着で祝事から葬儀までどこへでも着てゆくというぐあいでした。

このような戦後の苦戦のなかで祖母が八十八歳の誕生日を迎えたので何とか形だけの祝をしてあげました。が、子供八名に祖母、夫とあわせて十一名の家族、口に出しては言い表わせぬ程の苦しみの中で生活をしてきました。

もういかなることがあつても、再び戦争は起すべきではありません。私は子供たちにも、若い人々にもいつも言つてゐるんです。みんなでこのことをしっかりと考へて二度と戦争はおこらないようしようと。

2 フカヤマタでの避難生活

石垣町字石垣 宮 良 高 司（四十歳）
宮 良 孫 良（三七歳）

いのをそれこそがまんして食べました。潤滑油を使うと、激しい下痢症状をおこすのですが、それでもみんな食へていたようです。

ある時長男が夜になつて名蔵にさつまいものを盗みに行くといつて私がとめるのも聞かずに出でた。あまり帰りがおそいので何かが、兵隊にみつかつてそのものを放り出したまま逃げていった。私はそれをみていたので、夜になつてそれをとりにいつてきたのだが、母さん明日の朝食のことはもう心配いらないよ」と母である私にむかつて息子が言うのです。私はもう胸がつまつて何にも言えず、自分の烟がないわけではないし、財産がないわけでもない、何の因果があつてか、この戦争のために、だいじな息子に盗みをさせ、また人の刈り終えて捨てた水田のマタマイをこじきのように刈りあさらせて……そんなことをしてまで食べてゆかなければならぬのか、と思うとただ泣けるばかりであります。

「イクサユーデ、アリリ、ダイジナファーカイ、アンジ、マタマ・バスター・ヌストゥル・バスマー、フォーン・デアラギ、チューク・ナカリダ・ユー、タン・ディナ・スカラヤ、ファーカイン、マーカイン、イクサユーバ・アラシントンナ」（戦争というものがあつて、大事な子供にこのようなマタマイを刈り取らせ、またどうぼうをさせ、食べて生きていかなければならぬいかと思うと泣けてならなかつた。どうか今からは、子や孫に戦争がないような世の中にしてほしい）

という気持でいっぱいでした。

そんな生活苦があるので金は何の役にもたちませんし、誰れも食

高司 軍から避難命令が出る前の生活を話します。

私の家は石垣小学校のすぐ裏にあり、当時石垣小学校は衛生兵の駐屯地ありました。敵はそのことを知つてか、よく爆撃をしてきました。私の家にも爆弾が落ちました。それを取り除いてくれと軍隊に頼んだら、「そんな余裕などない、君たちは避難をせよ」と一蹴されました。一時自宅の後方にある墓に避難をすることにしました。墓は、岩を掘りぬいた墓で、中は四畳半程ありました。墓の前は葬畠になつていて、それを収穫しようとしていたら空腹にあい今日は死ぬな、と思ひ急いで近くにあつた戸を頭においかぶせて身動き一つもせぬじつとしていたら土くれをかぶせる程度で命拾いをしました。ほんとうにこわかった。その時村田家は爆弾が落ち大きだったので。

墓での避難中三女の順子（昭和二十年五月八日生）が生まれました。墓の中は通気が悪く薄暗く、湿度も多く、四畳半の蚊帳はつれが窮屈でいやな生活でした。

順子が生れて一ヶ月後だったと記憶していますが六月上旬、軍命で石垣は「フカヤマタ」に避難せよとのこと、さつそくその準備にとりかかりました。祖父は、二日前に避難小屋を作りに「フカヤマタ」へ行つてきました。口中は空腹がはげしいので未明出発することにし、私は、食糧を島馬に積み、次女の久美子をおんぶし、妻は、一ヶ月余りの赤子をだき、祖母をお供し避難しました。年寄りを山奥まで連れていくのは、なまたいてのものではなかつた。その時の生活を今思い出すだけでも、ぞつとします。

避難小屋は、隣組単位でつくり、十二世帯が入れる長屋でした。

西の方から石垣四町内、三、二、一という順序に小屋は作られていました。

避難者は老人と子供たちと女人たちが主で七〇〇世帯、一五〇

〇～二〇〇人程いたと記憶しております。

夕方には各自、部落の畑に行き、アッコン（さつまいも）、栗、

キン（ひえ）などを取ってきて食べました。

孫良 私は、フカヤマタの下に「ピニス田」を花城長助さん富良

高嶺さんから借りて二反ほど作っていましたが、一か所はイノシシ

にやられ、他の一か所も不作で少量の収穫しかありませんでした。

そのうちに、マラリア患者も続出してくるようになり、避難小屋の

生活は不安でたまりませんでした。マラリア患者の最初の死亡者は

花城正頃さんで、その人はそのまま山で穴を掘りうめました。

高司 私は死体を二体も火葬場までかついで山をおいたこともありました。

七月に避難解除も出、部落においてきたのですが、マラリアの猛威は後をたたず、夕刻、二、三人で死体を運ぶりヤカー、荷車の姿が毎日のように見受けられました。毎日のように大量の死体が運ばれてくる火葬場は処理能力も限界にきており、露天で死体を処理するありました。

避難小屋での教育ですが、とても出来る状況ではなかった。校長以外の教師はほとんど徴兵にとらえているようでしたから、時々校区の校長が避難小屋を巡回して廻り、子供たちを集め訓話をする程度で、学校教育はもうストップしていました。

孫良 それから、今でもしゃくにさわることですが、避難小屋がありました。

ら家に帰ってきたら、何と家の中がカラッポではないか。畳ははぎとられ、みそがめはなくなっているし、雨といもとられて無い、あとでその犯人がわかつたんですが、なんと日本の軍隊だつたんですよ。軍隊に文句を言えばすぐ非国民だと一喝されるし、憤まんやるかたなかつたんです。日本軍は横着でしたね。

こういうこともあります。私は宇石垣の副会長をしていた関係上、微用、供出の世話をさせられました。崎枝孫次・平得永嶺さん（当時六〇歳）いずれも不具者でしたが馬をもつてているという事で仕事に革命ということでかりだされ、オモト岳から開南に木材運搬をさせられました。羽地清雄さん（当時五六歳）は病氣で寝ているのに、前日召集されていたのになぜ来ないか、といってどなりつけてくるのです、病氣で来れなかつたといおうとするけど、ふるえて一言も出ない。そのことを私が話すと軍は憤然としていた。

とにかく軍隊には道理など通用しなかつたですね。

3 竹富島における避難命令とのたたかい

竹富島 前 新 と よ（三八歳）

昭和二十年六月十六日はお産の予定期であったが、区長は十三日に由布島へ避難するように命じた。「お産だから行けない」とことわると、区長は「船の中でお産してもよいから行け」と命じた。そんなに言われるので行く積りでいたら、十三日は台風のために出航は延期になり、十六日を迎えた。

十六日には、空襲がひどかったので、家の裏の防空壕に入っています。

めの体験だったので、こわさも知らず、子ども三人を引きつれて、大川へ走った。その後空襲が続いたために、疎開せずにすんだ。

避難をことわる

隣組長から、「子持ちから先に由布へ避難しなさい」と指示が来た。私は、命のほしい人が避難するのであって、配給を受けただけの食糧しかない、私のように子どもの多い者は、どうせ餓死せねばならないから、絶対に行かないとがんばった。隣組長は、「では隊長にその旨言いなさい」といった。しばらくして組長は「もし敵が上陸したらどうするのか、捕虜になる氣か」と問うた。それに對して私は、「絶対に捕虜にはならない。非常袋にカミソリと細縄を入れて持っているから、海のそばであれば細縄で親子しばって海に入れればそれで終りである。陸であれば、カミソリで子どもを切つて、そのあと自分が死ぬ覚悟はちゃんとあるのだから、私は絶対捕虜にはならない。だから避難はしない」と言いはつた。

不幸中の幸い、どこにも行かず竹富の家の下にいて、生きながらえた。

竹富島 宮 良 千 代（三一歳）

昭和十九年十月十二日に、私は子どもが多いから疎開はしないとことわり続けてきたが、台湾に疎開しないといわれて、無理やり竹富から石垣の方へ行かされた。

その日は飛行機が四機、飛行場に現われた。私は空襲だとは思わなかつた。演習だとばかり思つて、本家から大川の自分の家に帰る途中、「木の陰に隠れる、歩くな、止りなさい」と言われた。はじ

4 一〇・一一空襲の体験

字伊原間 玉 木 勇（四二歳）

玉 木 タマエ（四十歳）

5 伊原間・平久保部落の人々の生活

勇 わたしたち五人家族（祖母、子ども二人）は、伊原間で、いつも

やひえをつくり、仕事のあいまに、猪や魚を探つてきたりして平和な生活を送っていました。

ところが戦争になり、そんな平和な生活なんぞどこ吹く風、みじめな生活を強いられ、さんざん苦しめられました。

軍が平久保半島に来たのは昭和十八年ごろだったと記憶しております。平久保の安良岳に監視所をつくるためにやってきました。軍命をうけ、区長の比嘉長次郎さんは、徵用名簿をつくり、部落民を監視所つくりに駆り立てるようになりました。

タマエ 徵用は、一回ごとに五日間、五回働けば帰つてよいことになっておりました。だが働く人が少なく、おまけに女ばかりときどおり、すぐ二回、三回と徵用命令がきます。ほとんどの人は、五、六回以上徵用されました。

伊原間から平久保部落までの道のりは約三里です。五日間の食糧を持参して平久保まで歩いて行き、そこでまた他人の家を借り、徵用されたことは、なまたいであります。わたしは小さな子ども（勇吉、みさ子）を祖母にあずけてきておりますので夜など子どものことが気にかかり眠れませんでした。夫は夫でこれまで軍の食糧班（猪をとる係）として徵用されていました。徵用で行く日などは子どもが、かわいそで、また軍に抵抗できない自分も情けなくどうしてこういう時世になったのか、にくまれてしようがありませんでした。

監視所つくりの仕事は、たいへんなものでした。石垣港から資材が平久保部落の海岸に運搬されたります。それを安良岳（約三五〇メートル）の頂まで、レンガ、砂、板、砂利、などを運ぶのです。急傾斜

の山道ときていて。足の関節がいたむ、途中で動けなくなる人もいました。仕事の始め、終りには必ず車（正木少尉）は人員点呼をするので、逃げることもできず、がまんして働きました。こんなに苦労、難儀してつくった監視所も敵の爆撃にあい、あかあかと燃えているのが避難先桴海からはつきりと見えました。なんとなくやな感じがしました。監視所には海軍がいました。レーダーや無線機もありました。監視所をつくり終るや戦争もはげしくなりだしました。

勇 伊原間にも曾我部隊の分隊約二五人が駐とんするようになりました。公館のうしろのジャンブルともう一か所は西海岸近く西村少尉の部隊でした。伊原間で最初の空襲の時、上里一郎さんの家が焼かれ、奥さんが機銃掃射で戦死しました。また当時はみなカヤぶきの家でしたから、延焼を防ぐため、部落民は大騒動でした。

タマエ 空襲がはげしくなりだしたので今度は強制避難命令です。伊原間約九〇名、平久保約三〇名の人々は、桴海という所に避難せよとのことです。敵が上陸するから早く避難せよとのこと、さあ、たいへんです。夫は、祖母、子ども、家財道具、食糧を小テンマ船にのせ、連れて行くことにし、わたしは陸路、山道を牛馬を連れ行くことにしました。牛馬をつれて桴海までいった難儀はいまだに忘れることはできません。牛二頭のうち一頭は、牧場において、馬一頭、牛一頭をつれて、海岸に出たり、川を渡つたり、山に入つたりして朝早く伊原間を出発したが日が暮れて桴海に着くという実状でした。

約一二〇人の人々が一緒に移動したのでは、敵に見つけられる

いうので、一〇名ほど一組として時間をずらして出発させました。避難所は、伊原間の人が今の中原部落の「野やし」の手前、平久保の人が富野校の近くでした。曾我部部隊は富野校のある所で、長い兵舎が六棟ありました。約三〇〇名の兵隊がいました。

避難生活も落ち着かないうちに、また軍からの徵用である。避難地にきてまで徵用されるとは、内心おだやかではありませんでした。

監視所つくるのにさんざんこき使われたのに、また今度は、兵隊の米や、芋をつくるための徵用である。なんでも徵用といえば、人々をかってに使ってもいいとも軍は思つてゐるみたいでした。

避難生活は、日が昇らないうちに、食事はつくつておかないといけないし、夜は灯をともすことも禁止、子どもを泣かしてもいけないという不自由な窮屈な生活でした。野菜類もなく、野やしの新芽とかパパイヤなどを食べました。

兵隊たちも氣の毒でした。青白くやせていて何か食べ物はないかと避難小屋の近くを通りにせびるのでした。彼らは、毎日箱を背おい、オモト山を往復していました。たいへん重労働のようでした。これでは戦争は勝てないと思った。でもそんなこと口にだしてはいえませんでした。

勇 軍隊の内部も荒れていきました。わたしは軍の食糧班に徵用され猪をとつて軍に納める他、昼夜を問わず、食糧倉庫とか軍の芋畑や田などの見張り番をさせられていたので、よく軍の内部のことがわかりました。

曾我部隊長は横着でした。部下に足を洗えと足をなげだしているのである。わたしは、しゃくにさわって、「隊長、あなたも皇軍の

兵士なれば、一兵卒の者といえども同じ皇軍の赤子じゃないか、自分の手足は自分で洗えばいいじゃないか」と言ってやつたら、隊長はまつ赤になり怒って軍刀をとつた。「こちらが早いぞ」と猪用の鉄砲を向けたら側からそれを見ていたB29というあだ名のつく大西洋尉が「やれやれ」と言つたので、事無きを得たのであるが、その後は自分で手足を洗うようになった。

わたしは本籍が四国でして、早くから伊原間に住んでいた関係上兵隊にとられることがなく一般人として徵用にかりだされていた。それで第三者の立場から自由にものがいきました。自由に言えたといつても勇気のいることでした。また沖縄出身の宜保さんという方が、食器（竹の一節を二等分した物）をこわし、同じ仲間同士の兵隊から「食器をこわしたもののは汁をつぐわけにいかない」といっていやがらせを受けていた。彼は泣きながらその事情を話し、食器を作つてくれるよう頼まれた。大工道具をもつていたので作つてやつたら、たいへん喜んで、御恩は一生忘れませんといつて、軍が毎日兵隊に配給するキニーネ（マラリアの薬）をもつてきてくれた。「これは、きょうの分の配給だ、自分はマラリアで死んでもよい。おじさんの御恩は一生忘れません受取つて下さい。これしかあげるものはありません」といつてキニーネをおいていつたのでした。それから新垣という兵隊の火葬の仕方である。彼はマラリアで亡くなつたんだが、半分焼きにして放置してあつた。これをみてわたしは「せめて死んだ時ぐらい手厚くもてなしてやつたらどうかね、あのまほ何か」と部隊長にくつてかかった時もある。

それから軍の上層部連中が、罐詰を盛んで食べ、杉野一等兵に責

任をなすりつけ、杉野を石牢といって石でつくった墓みたいな所にとじこめて置いて、他の兵隊たちのみせしめにするという事件がありました。

平久保の監視所をつくっている時の話ですが、当時平久保の区長、松本寛清さんは、その監視所をつくるため過労で死亡しました。それに対し、軍は知らん顔である。わたしはしゃくにさわり、「軍にあれほど協力している人に對し、何の礼もないのか、せめて棺箱をつくる板、くぎぐらい出してやつてもいいじゃないか」と正木班長と口論したことがあった。そういう住民を牛や馬同様にしか見ない軍隊だし、牧場の牛馬はかつてに盗って食べるし、住民の反感をかうことが多かった。住民と協力しないで戦争に勝てる由はない、今度の戦争は負けるのじゃないかと思った。そう思っているやさきに八月十五日、終戦を迎えた。

戦争は終った。ほんとに嬉しかった。戦争は終った。一日も早く

伊原間に帰ろうと避難小屋は引あげの準備に大いそがしだった。

タマエ 平久保、伊原間の人々はマラリアで死ぬということはありませんでした。今まで戦争で忘れる出来ないのは、監視所つくりのつらさ、避難生活、それに徴用、軍の横着、沖縄の兵隊たちに対する差別などです。二度とこのような苦い経験はしたくないし、また子どもや孫たちにさせてはならないと思います。

二、尖閣列島遭難

はじめに

沖縄戦は一九四五年六月二十三日、組織的な戦闘は終了したと言われるが、沖縄本島もふくめ先島諸島やその近海ではなお戦闘が散発的に行なわれていた。

沖縄本島での戦況がほとんど米軍の一方的な進撃と変わり、日本軍の敗北が決定的となつた五月から六月にかけて、逆に八重山では避難命令や疎開命令が出され、住民は戦況の進展はいつさい知られず、最後の決戦がやってくるとおびえながらその準備にあわただしく動いていた。

六月三十日、台湾向け出航した疎開船一心丸と友福丸は途中尖閣列島附近で爆撃を受け、多くの死傷者を出し、友福丸は沈没、残る者は一心丸に集められて命からがら魚釣島へ上陸した。

以下は八重山、富吉の生存者の証言と手記である。

遭 難 記 (1)

石垣町字登野城 石 垣 ミ チ (四三歳)

昭和二十年六月二十四日、五日に、二十四回目の台湾疎開命令が軍から出ました。

台湾疎開は自由疎開で、ほとんどの者が縁故を頼りに疎開しておきました。

六月三十日午後八時三十分から乗船し、石垣の第二桟橋を午後九時に発ちました。

船は、第一千早丸（一心丸）、第五千早丸（友福丸）で、一八〇

名ほどの疎開者で、そのほとんどが老人、婦人、子どもで、その他に台湾人、朝鮮人が乗っていました。

船は七月一日未明に船浮港に着きました。

その頃、昼間の航海は危険とされていました。昼間は、敵の潜水艦、飛行機に発見されやすく、攻撃を受けるといわれていました。

船浮港で第一千早丸が機関故障のため出港がおくれ、七月二日午後七時ごろ尖閣列島経由のコースで一路台湾へ向けて出発しました。

七月三日午後一時ごろ、尖閣列島を後に、前方にはかすかに台湾が見えていました。

ところがその時、飛行機がどこからともなく船をめがけて攻撃してきました。

第五千早丸から軽機関銃が米機めがけて撃ち出されたがむなしものでした。飛行機は爆音を轟かせ、機銃を雨の如くあびせてきました。身をかくすところもなくおびえていたら、右側のおばさんが一声叫んだままうつ伏せに死に、左の子どもがやられ、前の人人が重傷を負い、うなりだしました。

負傷して血だらけになっている者、機銃にやられ死んでころがっている老人、飛び散った人肉が体じゅうについている者、子ども達はお父さん、お母さんと泣き、さけび、老人は息子、娘、孫の名を呼び、そういう声が入りみだれていきました。台湾人が頭をやられ、顔面を血だらけにして子どもをかかえて助けを求めていました、朝鮮の婦人が腕をやられ、泣きながら助けを求めていました。一瞬の内に船内は生き地獄と化しました。

何とか機銃掃射を受けるなかで泳げる者は次々ととびこみ、逃げ

る者が出てきた。機関士は海にとびこむ時にモモをやられた。その内に第五千早丸の燃料タンクがやられ燃えあがりました。火のまわりが早く、老人は海にとびこむこともできずにそのまま焼け死んでいました。

ある妊婦は、背中におぶっていた子どもの帶をはずし、自分の腹帶もはずして、一本の帶では子ども達を束にしてくくり、もう一本で自分と子ども達を結ぶようにして、夫の名を呼びながら親子ともども海にとびこみ死んでしまいました。ある老父母は、「自分たちのことは心配しないで、おまえは必ず家へ帰りなさい、おまえが帰らないと家はなくなつてしまふ、どんなことがあっても家へ帰るんだ」といい、娘を海に飛びこませ、自分たちはそのまま焼け死んでいました。

船からたれさがっているロープには何名かの人がつかまっていますが、そのつかまっている人をけり落して助けを求め叫んでいます。また、子ども二人を左と右にして自分の体に帶でくくり、波にかぶさりながら必死にロープにさがっている母親もいました。海は死人が浮いて、生きている者との区別もできない程で、また一枚の板に数名ぶらさがつて波の流れるままになつていています。大半の者が泳げない者でしたので海中に沈んでいくものも多くいました。

そのうち、第一千早丸からテノマ舟がだされ、やつと救助が開始されました。

救助された者はみんな着のみ着のままでした、帶で子どもを自分

の体にくくっていた婦人は救助されたが、しかし子どもの一人は既に波にさらわれていました。

ほとんどの者が肉親の離別で悲しみに沈み、一瞬の間に眼前におきたできごとにまだおびえていました。そのうち、第五千早丸（友福丸）は海底に姿を消していきました。第一千早丸（一心丸）は急いでその場を逃げるため船を出航させようとしたが、機関が機銃でやられているのでエンジンがかからなかった。

みんなを三組に分け、一組は機銃修理、一組は機銃にやられた船体の穴うめ、一組は水くみの作業をすることになりました。

船は潮の流れるままにまかせれば、沖縄本島か奄美島方面へ流れरというので、皆の持物の中で丈夫そうな布や着物を出し合い、帆を作り風まかせに船を走らせました。

しばらくすると、いきおいよくエンジンのかかる音がしたので皆ほっとしました。

とりあえず無人島である尖閣列島にいくことになりました。さいわい、もと魚釣島で古賀さんがカツオ業を営んでいた時にそこで働いたといふ伊良哲さんがいたので、その人に水先案内をしてもらいました。

島に近づくにつれ一つの岩かけから手旗信号をしている兵隊の姿が二、三人見えたので魚釣島に来るよう信号をゆっくりかえしました。兵隊は六名おり、遭難して助かったとのことで自分たちを助けに船が来たものとよろこんでいたので事情を話してやりました。

魚釣島では暫時の休息のつもりで荷物をおろし、水でのどをうるおしていましたら、エンジンが故障で出航できず無人島魚釣島での生活

が始まりました。みんなの持っている食糧、米、味噌、塩さけ、カツオ節などが出され共同炊事が始めました。大きなドラム缶にわざかな米を入れ、クバの芯、ニガナ、チヨウメイ草、ミズナなどを入れた雑炊で、お米は数えられる程のものがおわんに入っていました。

共同炊事は、十日間ほど続きましたがそれ以後はやめました。日がたつにつれて食糧がなくなり、食べ物を探すのにひと苦労しました。

食べ物を自分一人で隠れて食べる者がいたので共同炊事はやめたものと思われます。大浜史さん達があたりました。

さいわいにドラム缶にアルコールがありましたのでそれで消毒してくれました。

朝、消毒し、夕方再び消毒しなければウジがわいてたいへんでした。朝鮮の女の方で腕をやられ、わずか皮だけで腕がぶらさがり、その腕から湯呑み茶わんいっぱいのウジができました。この方は泣きながら、ぶらさがっている腕を切ってくれと嘆願して、どうにもならないのでカミソリで切ってやりました。船で負傷した者は、華品もなく、さらに食糧が欠乏していく中で衰弱し、全員が次々と倒れていきました。死体は離れた所で石をならべ、それにクバの葉を敷いて死体を寝かせ、その上からクバの葉をかぶせて石をのせ、最後に砂をかぶせて葬式を行ないました。

日がたつにつれ、食べられるものが少なくなると、いろいろな難

マ舟を作りあげました。

それから誰が連絡をとるために行くのかという問題で話し合われた結果、船員であった上原亀太郎、伊礼良精、柴野川盛長、伊礼正徳、美里勇吉兄弟、山内軍曹、金城珍吉の八名が決死隊として選ばれました。

例により爪と髪を切つて紙に包み、名前をしるして万ーの時は助かる者が家族の者にまちがいなく届けてくれるように互に誓い合いました。自分のおばあさんが冰毒の祝に着けたカリーアのある着物だと言つて、その赤い布をちぎつて体墮にしてくれる者もいました。テンマ舟の帆は、それぞれの持ちものの中から丈夫そうな着物をぬい合せたもので作つてありました。

いよいよ出発という時に准将がぜひ自分も乗せてくれと頼むのでいつしょにいくことになりました。

疎開者全員が無事に連絡がとれるよう神に祈る中で、八月十二日午後五時頃一行は八重山向け出発しました。決死隊は六つの水筒に水を入れ、おにぎり一人三個ずつもらい、クバの芯を舟にくくりつけて出発しました。晩は、舟は順風に乗つて走りました。

しかし翌日は朝からちつとも風がなく、しかたなく帆をおろしてカイでこいでいる中、三回も敵機に遭いました。その度に舟をひっくりかえし舟の下にもぐつて飛行機が去るまでかくれていました。三回目にあつた飛行機は、低空してきていたのであわてて舟をひっくりかえしたが間に合わず、これで最後かと思つて緊張していたら、飛行機はそのまま飛び去つてきました。

舟をおこし、水を汲み出してさらにこいでいると、遠く彼方に山

が見えました。これは間違いなく八重山だ。富古には山がない。皆は喜びこれまで以上に力ませにござりました。

川平の西の湾に無事たどり着いたのは八月十四日午後七時ころでした。皆は抱きあってバンザイと喜びあいましたが誰一人とも歩く元気はありませんでした。浜に四つんばいではいあがり、そのまま休んでいると浜辺の近くにバンシルがたくさん大きく実っていたので一人が全力を尽して走って這つていきました。バンシルを皆がいる所に

なげてくれました。そのおかげで元気をつけることができました。

川平部落へ歩いていく途中、避難小屋があつたのでここでおかゆを御馳走になり、午後九時頃川平の部落に着き、これまでの事情を話し救助をお願いしました。

川平の部落から早速石垣の旅団に連絡がとられ、旅団から台湾航空隊へ連絡されました。魚釣島の疎開者は、餓死寸前の状態になりました。八月十五日友軍機が魚釣島の上空を旋回し低空してきて荷物をおとしてくれました。

荷物には軍隊のカンメンボウとコンベイ糖が入っており、カンメンボウ二十個とコンベイ糖五個ずつ手のひらに分けてもらいました。口に入れながら皆は涙を流し大きな声で友軍機にお礼をいっていました。

翌十六日朝、石垣から救助船が来ました。皆は涙を流して助った事を喜びました。

これで助かった。一刻も早く生まれ島へ、わが家へ帰りたいと気は急ぎましたが、いざ船に乗る段になると、この島で死んでいった肉親をさびしく置いていくことがどうしても想ひない。それで日々

おきぎりにされた伊良皆さんは後日、鈴木さんの兄さんが船を傭船して救助に行きました。しかし伊良皆さんは島島で崖から落ち、すでにこの世にはおりませんでした。

鈴木さんは一人でおきぎりにされた事を知った時は泣きわめき、自分はこの無人島で死ぬのだとあきらめていたとのことでした。それだけに、その時は涙が流れても止まらず、かわりはてた姿を兄弟にさせられて助けられました。しかしその鈴木さんは、石垣に来て間もなくして亡くなってしまいました。

石垣島を出発してから四十八日間の死闘でありました。この時、亡くなられた方は五、六〇名位で一二、三〇名位は無事に石垣島に帰えることができました。

遭 難 記 (2)

富古島 屋 部 兼 久 (十七歳)

昭和二十年、石垣島に駐留していた島田部隊に漁撈班として徴用

されていました。十歳の時、母が病氣となり入院費がなくて、二十

歳の徵兵検査までの期限で、大島出身の人の所で雇い子となりました。俗に云う糸瀧売りにされたのです。年二回小使いをもらうだけでした。親方に、軍は、私たち雇い子のとった魚の代を払っていたかどうかはわかりません。ダイナマイトを軍から渡され、それに点火して海中に投げこむのです。それは危険な漁法です。空襲機が来たる機銃弾は海の中では水面下五寸しか効力はないからもぐれと教えられ、毎日、名蔵湾あたり、觀音堂から新川の間、沿岸から一キロの近くで魚とりをしていました。

採つた魚を馬車に積んで、山道を通って帰るのですが、そこでも度々空襲に会い、馬車ごと魚もほうり出して、道ばたのかげに逃げこむと云う毎日が続きました。六月頃だったと思います。軍の徵用船に乗らないかと云う話がありました。母の入院費四百五十円の前借金を何とか期限前に返したい一念から、また毎日、生きるか死ぬかの漁撈班より、いつそ船にのりこんでやれと云う気になつて徵用船に水夫として乗船希望したのです。一心丸と友福丸の二隻で台湾経由南方に行く事になりました。今にして思えば、フィリピンあたりで重油を積みに行くはずだったのです。船倉に仕切りがなく、重油がしみこんでいました。

友福丸が百五十屯の機帆船で、石垣の井上造船所製でした。一心

丸が二百屯程度、船は本土製で船長も本土の人で、家族五、六名をともなっていました。空船で行くよりは台灣の基隆に寄港するついでに疏開者をのせる事になりました。両船は民間人百二十名くらいずつ乗船させ、石垣港の第一埠頭を出港しました。途中、西表島の

船浮港に寄港しました。

船浮港を出てから何時間かたつてお昼すぎでした。爆音と共に大きな黒い飛行機が近づいて来て、ゆっくり旋回を始めました。アメリカが船のコースを知つてはこまる、石垣—西表—尖閣列島のコースをとりキーレンへ抜けるはずだったのが、発見されたのです。バリバリと云う機銃掃射の音がして、私は船長室のうしろ部屋に逃げこみました。そこには船長の家族がいました。おばあさん、奥さん、子供四、五人でした。おそろしくなつて船長の家族たちのくるまつている毛布にもぐりこみました。毛布が引っぱられたせいでしょうか、その奥さんが、自分の家族の面どうも見きらんのにうるさいと云うし、向うへいつてくれというので、そこをすこし離れた、床にふせました。その時でした。私の頭をかすめるものがあると思ふと奥さんがうめきながら動かなくなりました。みそおちに弾があり即死していました。その所に数秒前私の頭部があつたのです。危うく頭を撃ち砕かれる所だったのです。下の船倉におりる四角の入り口あたりからも、人のわめく声が聞えていました。二度目の攻撃で爆弾を投下しました。三度目の攻撃でロケット弾が燃料タンクに命中し、燃え上り始めました。真黒な煙が、空が見えにくらいに上がり、飛行機は去りました。内臓がとび出た人が甲板わきにうめいていましたが、それにかまつてはおれませんでした。

火の手に追われていてるうちに熱くなりました。水泳には自信がありましたがからいつも腰から離さず身につけていた水中めがねをかけて半ズボンのまま海中へとびこみました。燃えあがると次の手において、乗客が次々にとびこみました。大半の人がとびこんだ

かと思うと顔の色が変わり動かなくなりそのまま沈んでしまうのです。十五歳くらいの女の子がばたばたしておぼれかかっていました。助けようとしましたがしがみついてくるのです。もうぐりながら、下から引きあげようとしましたが、しがみつくなと云うたがきかないのです。又もしがみつくのです。

私もあぶなくなり、その子のそばを離れました。両手ではたばたと水面をたたき、間もなく見えなくなりました。水中眼鏡で、沈んで行くのを見ました。船の上では火の手がますます高くあがり、との方では必死になつてボートを下そうとしていました。あわてているのがわかるのです。片方をつるしているロープを切つてしましました。そのひょうしにボートもろとも乗つていた人がなだれ様に海中に落ちて来ました。銃をかかえたままの兵隊が、それをはなそともせず、銃を抱きかかえながらとびこんでくるのを見ました。船柱のリレキをはずして海中に投げこみ、そのまわりに人がとびこみ始めました。たくさん的人がその丸太にしがみつきました。その丸太がくるくるまわるのです。しっかりとしがみついた人はその丸太と共に回転して潮水を飲み、それが二度、三度とまわるうちに手をはなしして二度と浮きあがらないのです。二十名くらいしか助からなかつたと思います。

海の中で漂いながら気がついて見ると友福丸が機関が止まつたまま漂つていましたが、ボートをおろし救助作業が始まつていました。助かつたと思うと、ものすごい寒氣におそれました。潮流に流されながら必死に丸太にすがつているうちに最後に救いあげられました。

潮流六マイルの所で船体の大きな船はこぐわけにも行かずとうとう船をはなれて戻つて来たのです。生きて帰れる望みが又、一つ失なわれたのです。

米粒はわずかに与えられる程度で、クバの芯、ミズナの浮いている食事も胃を通じてそのまま出でてくるという、激しい下痢におそれました。ふらふらする体で浜において行き、今食べたばかりのものも何分もたたぬうちに下すのです。よろめきながら砂浜に穴を掘り、かぶせるのです。もう生きる力もなく私から先に死なせてくればと云う気持になつていきました。

上陸して助かつた人々も死にたえて一人で最後まで、この島にいる事を想像するとおそろしくなつてきました。少し胃の調子が良くなりました。今度は激しい空腹感におそれました。ミズナ、クバの芯のなれない物を喰うと最も激しい下痢です。思いあまつて、はづかしい話ですが、食糧を集めて保管してある所からかつお節を一本、盗もうとしました。それが見つかってたかびんたをとられました。人間は食足りて礼節を知ると云いますが、ほんとです。なボートが出来上がりました。石垣島へ連絡のために決死隊として何名か行く事になりました。どうせそこについて、死を待つよりはそれに乗りこむ事を希望しましたが、体が弱っている上に若すぎるとはねられました。

空腹と、絶望の島に小さい飛行機が水平線のかなたにみえました。島に上陸してからも、米軍機の銃撃が度々ありましたし、用心して岩かげに身をかくしていました。良く見ると日本の飛行機でした。

一心丸は燃えながら五時頃、海中に沈んで行きました。ダンブルに入っていた人はほとんど焼死したのち、沈んだものと思われます。そこにいた人は五、六名ぐらいたようです。

友福丸は、機関台の近辺が弾にやられ、エンジンもかかりません。

ひと晩中漂流して、翌朝九時頃クバ島（魚釣島）が見えました。

そこに近づきそそり立った岩壁のあいまに小さな砂浜のある入江を見つけてそこから上陸したのが午後三時頃だったと思います。

船倉の中に荷物があるから取つて来いと云われて、おりて行きました。異様な臭いがして、荷物を動かそうとした時、その荷物のうしろに死体があり、それがぐらりと動いたのです。失神しそうになりました。暑い船倉の中で二四時間以上経つてその臭いにあい目まいを起し、派につくとはき気をもよおし、たおれてしまいました。一週間もの間空腹なのに食事らしい食事が喉を通らなかつたのです。

上陸してからも毎日毎日、人が死んで行きました。弱った老人がたおれ、負傷した人、子供の順で死んで行くのです。埋葬しようにも硬い岩根の島で、穴が掘れないのです。離れた所に石をつみ上げてとむらいました。お椀いっぱいだけの米の飯をたいて供えるのです。

来る日も来る日も砂浜で海を見ているのですが、沖を通る船は一そうもいません。

友福丸を応急修理して石垣島へ連絡に行くと出発した人々は一時間後は再び機関故障で、運行不能となり、船を放棄して戻つて来ました。

た。一回目は島のまわりを飛び、二回目は手をふりました。丸い筒のものを二つ落しパラシュートが開きました。乾パンが入つていました。助かつた、ようやく連絡がついたのです。数日後、二つの小型機動船が来ました。軍医らしい人も乗つっていました。なま米の配給を受けましたが、胃が弱つてゐるからうすめたおかゆにしてたべる様云われました。

夜が明ける頃、登野城第三棧橋（今はない）に着きました。日本軍の所に集まる様云われるままに、親方の所に帰ると、白い位ハイがかざつてあるのです。私のです。消息をたつたまま、船ごとわかれなくなつたので、とむらいをしたと、云つてきました。人相が変わらなくなつたので、とむらいをしたと、云つてきました。人相が変わり、見分けがつかなかつたのだろう。近づくと一緒に働いていた仲間があとすきりして行くのです。「ほんとの人間か」ときくのです。髪のものびぼうぼうしているので又、きくのです。「おまえはほんとうの人間か」と。

三日目に初めて普通の御飯一ぱいだけをたべさせられ、うすめたおかゆの量を少しずつ減らして行き五日目にようやく普通人の食事をとる事が出来ました。親方の奥さんが、気の強い人でしたが、気をくばつてくれました。

一緒に助かつた人々が、一気に腹いっぱい食事をたべたために胃腸障害を起して寝てゐるという人がいました。見舞に行きましたが一週間後に死んでしまいました。

石垣の人々がせっかく助かつて以來がらも飢餓状態からと家に帰つた安堵感からと、食事をがつがつ食つたため、死んだ人がかなりいたと云う事を聞いています。

宮古平良町下地 博(十二歳)

昭和二十年私が十二歳の時でした。伯父夫婦と共に石垣へ疎開しました。宮古を発ち多良間島を経て石垣島の登野城へ着きました。

石垣島のかーら山に一時身をよせました。

伯父は当時、宮古島で唯一の靴の製造、修理業をしていたせいもあって、憲兵たちも良く出入りしていました。その人たちから情報でしたのでしょうか、沖縄本島が米軍によつて上陸され、次は、

宮古、八重山だと云う事で、なるべく広い所が良いと、今度は台湾へ行く事になりました。

石垣港で船にのる時、基础教育を受けていました。グラマンなら上から襲つて来る。大きな飛行機は横から来る。その時は、なべく船の方に行く様に。

六月三十一日昼すぎ飛んで来た飛行機は、大きな、胴体の下が、

ボート型になつているマーチンと云う飛行機です。教えられた通り、船底の方へ逃げこみました。荷物と荷物の間に体をひそめてふるえていました。

ぎりぎりの低空で、船をめがけて攻撃して来るのが手にとる様にわかるのです。ズシンズシンと海中で爆弾の炸裂するのが伝わって来ます。船のともの方にすえであつた機関銃で、乗船していた兵隊が戦闘している様子でした。何十分かたつた頃、船に大きな衝撃があわり、ゴウゴウと何かの燃える音がしました。油くさい臭いと共に、船内が真暗になり、船がやられた事を知りました。あわてて、

人々をかきわけ、甲板にとび出しました。

泳げるらしい人がポンポン海へとびこんでいるのです。船の中央部あたりにあがつた火の手におされて泳げない年寄り子供が船のともの方とへさきの所で、ひとたまりになり、おろおろしました。ダンブルのふたはすでになくなり、海中に投げこまれたそのふた板には何名かの人がすがりついているのです。燃えさかる火で体がだんだん熱くなり、必死になつて折れたマストを伯父たちと一緒に引き抜きそれを海へほうりこみました。とび込め、と云う伯父の合図で伯母と一緒に飛びこみました。

船が沈む時は、うずをまく。そのうずにまきこまれたらそのままひきこまれて沈んでしまうというので、船の近くから離れるべく、皆で必死になつて、丸太にすがりながら泳きましたが丸太の片方だけに三十名くらいの人がすがつてゐるため、くるくるまわるのでありました。

小さい頃から平良の町の海岸よりで育つたから、泳ぎには少々心得がありました。立ち泳ぎをしたおかげで丸太の回転にまき込まれずに、潮を飲まずに助かりました。私のすぐ近くにいた三十五、六歳の女性は丸太が二回くらいまわるうち声もたてずに、手をはなして行きました。だれも助けに行けないです。必死になつて命も

ち勝負の中で、六、七名だけが残り、漂流していました。

遠くの方で燃えなかつた方の船からおろされて来たボートが救助作業を始めていました。ロープを流して、ロープにすがりついた人から助けていました。泳いでいる人、何かにすがつている人はあとまわしにしていました。三、四時間も漂流して海中にいると、も

のすごく寒くなり、ガタガタふるえながら船にすくいあげられ、とけかかった黒糖を与えられた時は、そのおいしさを、ほんとにかみしめました。

いち夜あけて、島かけがいくつか見えました。「大きな島には水がある」「岩のすき間をつたわつて流れ水がある」「古賀さんといふ人の島で饅頭工場のあとがある」と云う話を八重山の人が話して、その島に船を着ける事になりました。近づくと人影が四、五人手をふつていました。漂着した兵隊の様でしたが、食糧もゆとりのある様子でした。私たちと同船している兵隊が合流する様、云つていました。が、初めはこぼんでいる様子でした。

食糧をどうするかと云う事で、もち合わせの食糧は全部出させました。私たちは着のみ着のまま無一物で助けられ、出すものが何もありません。共同炊事が始まり、ドラム缶を七部切りにしたもののがなべになりました。

マッチが残り少ないとこの事で、流木に火をつけておきました。

空襲はないものと思つて着たきりの服を洗つて乾し物をしていたら、例のマーチン機が飛んできてボンボンやるのです。一日二回、朝、八時頃と、午後三時頃です。定期便と呼んでいました。あわてふためいて、洞穴や、岩かけに逃げました。

初め一回だけ、おにぎり一個をもらいましたが、あとは節約するとの事で、野生のニガ菜、ミズナ、アダンの芯、クバの芯、百合の球根が食事の八、九割を占める様になりました。

燃えなかつた船に、船大工がいて、大工道具一式も持つていると、事で、あちこちやられている船を修理して、若い人たちをのせて

石垣島へ連絡に行くと云う事になりました。

米は、その大工の人人に優先的にあげると云う事で、その人の奥さんが水たまりで米をジャーと洗つていた。そばで見ていて指の間からこぼれた何粒かの米粒をひろつてたべました。

干潮を利用して水たまりの魚を棒でたたいてとつて来る人がいました。その人がすてた魚のはらわたを食べました。

バリカンをもつておばあさんがいて、自分で食糧探しに山にはのぼれません。バリカンを一回かりたら、クバの芯、何本かをあげ、それで生きのびてきました。

塩は、波のしぶきが岩のくぼみにたまり、一日たつと白い塩になります。わずかばかりの塩を少しづつ集めました。

食糧が不足して来ると、乳飲み子をだいた母親は子供に乳を飲ませなくなりました。乳飲み子は死んでしまいました。穴を掘る気力もなく、岩板の島は掘ろうにも掘れないのです。皆で小石を集めて一か所に葬いました。

栄養失調で、頭髪が抜け始めました。便にくさみがなくなりました。草食動物の糞のようになります。

あまりの空腹感にたえられなくなり、これだけは喰べるなと云われていたハシキ豆を、伯父にかくれて、煮て喰べました。喰えるじゃないかと思ったとたんに猛烈ないきおいで吐き出し、氣分が悪くなりました。あれ以来、三十年近くたつてゐるのに、今でも豆類が喰べられません。

十日間くらいかかつたでしょうか、ようやく船の修理が出来、エンジンもかかりました。その船に望みを託して、島のはてまで行

き、涙をながしながら見送りました。夕方、その人たちは、船をして帰つて来ました。故障して動けなくなつたと云うのです。大変だと云ふことで、今度はボートを作る事になりました。流木や、難破船の板を集めました。くぎは難破船から抜いたさびくぎを一本一本のばしました。クバの樹皮をより合わせて、板と板の間につめる糸を作りました。女の人たちは浜でよせ集めた各種類の着物を縫い合わせて帆を作りました。

空襲されたら、機銃弾は小型の舟の板はつき抜けるだけでこわさないから木のセンでふさぐ様にと、各種類の大きさのセンを作りました。ビンに水をつめ、一食分だけと云つて、おにぎりを用意していました。ビンに水をつめ、一食分だけと云つて、おにぎりを用意していました。ビンに水をつめ、一食分だけと云つて、おにぎりを用意していました。男の人たちはクバの芯をとつて、来てたせていきました。空襲機が来たら、ボートは転覆させて、舟から離れてでもぐる様に教えていました。二日目が空しくすぎて、もうあきらめています。三日後、昼すぎ、戦闘機が二機続いて来ました。

空襲かと思つていたら、日の丸が見えた。旋回して、落下傘につけられた一メートルくらいの筒を落して行きました。親指大の乾パン十個ずつ、金平糖二個ずつ、配給されました。ようやく連絡がついた事が分つたのです。

その日から三、四日後の午前の二時頃と思われる時に、ポンポン船の音がしました。小さな舟が二そら来ました。朝になると、戦争が負けそうだと、負けたとか、話していました。約五十日間、遭難して絶海の岩の上で寝ていましたし、石垣についていた時、初めて人家の廊下にねた時、廊下の床をなでながら生きている事の実感をかみしめたものです。

昭和二十年一月十七日、満四十歳でした。

宮古島が連日空襲にさらされる様になりました。小さな島より大きい島の方が少しでも生きのびることができると思いました。島づたいに多良間島を経て、石垣島に渡りました。台湾へ疎開するつもりだったのです。妻ヒデと甥の博とともに共栄丸と云う三十トントンくらいの船に乗りました。二十年一月十七日です。

石垣港に着いたとたんに空襲があつて、これでは、台湾のキールン港までの航路もあぶないと、船便もないまま、石垣町の民家を借りて住んでいました。市街地の空襲がはげしくなるにつれて車から車の命令もあって郊外の方へ移り、おもと岳の前にあるカーラ山に疎開しました。

四月二十九日になつて、疎開船が出たと云う事を聞いたのですが、その時は乗り逃してしまいました。六月の末ごろになつて、台湾行きの軍用船が出ると云う事を知られ、宮古の人もたくさん疎開して行っている事だし、途中の海上が気づかわれてもやはり行つた方が良いと云う事で乗船することになりました。六月三十日の午後五時頃だったと思います。

西表島の船浮港に一泊して、そこから出港する段になつて、一緒に石垣港を出港して来たもう一その船、友福丸が機関の故障で引き返し、あと一泊する事になりました。

七月一日の午前七時頃、船浮港を出て、与那国島の北側を通過し全速で船を走らせて翌日の夜明にはキールン港に到着する予定だつたのです。朝の空襲が始まる前に、少なくとも台湾近海まで接近しておけば、空襲が来ても、あとは何とかなると考えていたのです。

あと、ひと月もクバ島にとどまつたとしたら、強いもの勝ちで人が人を喰つたのではないかと思うのです。

ほぼ二百四十名のうち、半数の人が、空襲下の船上で、海中で、島での栄養失調で死んでしまいました。

一九六九年五月十日に、その島をたずねる事になりました。慰靈の小さな石碑を立てて来ました。命びろいした島で拾つて来た小さな石を大事にとつてあります。

宮良殿内のおじいさんが、一緒に遭難しましたが、パパイヤの種子を、その島にまいて来てくれと頼まれました。もし、だれかが、あの島に漂着したらその実を喰つて生き事が出来るからと云つていました。

天候異変でならともかく、戦争で船を襲撃され二度とクバの芯や、ハジキ豆やパパイヤの実をあの島で喰う人が出ではならないと思ひます。

遭難記 (4)

宮古平良町 羽地政男 (四十歳)

与那国沖を過ぎて基隆の山がかすかに見え始めた頃です。私は船の上部の部屋で、ゲートルをまいたまま、寝こんでいました。二時頃、大きな飛行機が南の方から来ました。米軍機です。旋回して、だんだん低空して来るのです。鋭い機関銃の発射音がきこえて、私のすぐそばにいた鎧木と云う子供を抱いた母親が、私の方へもたれる様に倒れて来ました。私はそっと体をざらしてその人から離れ船室から、外へとび出しました。母親は即死状態で子供だけ生きているのです。

乗ついた兵隊が船のともの方にすえてあつた機関銃で応戦するうと、黒煙を出して燃え始めました。撃ち合いが始まつてから三十分たつていたと思います。妻を海にとびこませるとおぼれかかっているのが見えるのです。近くの帆柱の根もとについている柱を引き抜き海に落し、甥の博もとびこませました。十二歳の甥が上手に泳いでその柱にたどりつくるのですが、妻の方は二十名くらいの人々がすがりつく中でおぼれて沈みかかっているのです。妻のいる近くへとびこみ、下から押し上げて、丸太にすがりつかせました。あとで気がついたのですが私の時計が二時三十分で止つてしまつたからとびこんだ時刻は丁度その頃だったと思います。私たちが乗つて來た船は間もなく燃えながら沈んで行きました。

一緒に出港して來た友福丸の方からボートがおろされ救助が始まつたのですが、あっちにも、こっちにも人が散り散りに浮いています。友福丸から五百メートルくらい流されてしまい、大声で呼び、手をふるのですがなかなか来てくれません。機関が故障してい

るようで、船はこっちへ来てくれないので。子供たちを先に救い上げているのがわかりました。

ゲートルをはずして、立ち泳ぎしている妻の首に巻きつけ、離れない様につかまえていました。かんかん太陽に照らされて漂ううちには、喉が焼けつく様に渴いてくるのです。

夕方になるまで流されながら漂つて救い上げられたのが五時すぎだったと思います。ポートから、友福丸に乗り移りましたが、その甲板にも死んだ人がころがったままになっていました。

その現場から脱出しないと、夜があけたら又空襲されると、必死になつて船員たちは、エンジンをかけようとしていましたが、機関のパイプが被弾しているとの事でなかなかかかりません。マストに帆を立て、船はのろくと走り出しました。そのうち、船がどんどん流されている事に気がつきました。初め北西の方向に見えていた台湾の基隆らしい島影が、一夜あけて見ると、南西の方向の水平線の上にかすかに見えるのです。台湾の島から遠ざかって、北の方へ流れている事が分りました。

その日は午前中流され通しで、一体どこまで流されるのか、不安のうちに過ぎました。

さいわいに雨が降つて、空から襲撃の心配はありませんでした。

晴天でしたら、また発見されてやられていたのではないかと思う。

七月の四日だったと思いません。午後三時頃になって、小高い島影が北西とおぼしき方向に見えてきました。石垣の人たちが通称、クバ島と呼んでいる尖閣列島内の一つ、魚釣島だと云うのです。その方向へ船が進むうちに、クバ島の近くに南小島、北小島があり、そ

こは通称、トリ島と呼ばれていて海鳥がたくさんいるがクバ島には水があり、クバの木がたくさん生えていて、その芯の部分は喰う事が出来ると云う石垣の人の話をもとにして、クバ島へ船をつける事がになりました。島の南側に、さだかではないが小さな入江らしい場所が見えました。近づくと、巾二十メートルくらいの入り江になつていました。その奥には三十メートルくらいの長さの砂浜がある事も分りました。早速上陸が始まりました。人数はさだかではありませんが百名余の人たちだったと思います。船で死んだ人を、一か所に集め、石を寄せ集めてつみ上げて、葬りました。

暑さの中で死後、二十四時間以上も経つて腐臭を発していました。

私たちは着のみ着のまま、半ズボンのまま、文字通りの無一物です。燃えなかつた友福丸に初めから乗つて来た人々のもつてゐる食糧は一応全部供出したのですが、それだけでは、これだけの人数の喰いつなぎはできないと云う事がわかりました。新川班、石垣班、大川班と、石垣の人々を中心に班の編成が始まり、各班で手分けして、食糧探しが始まりました。

四尺くらいのクバの木を倒し、その幹をはぎ、その中の竹の子の様な芯をとり出して、それを皆でもちよるのです。内緒で味噌をもつていて、クバの芯につけて喰べる人がいました。ねずみ、アカトカラヘビがいて、それを捕えて喰べようとするのですが、足の力が抜けていてそれを追いかける事も出来ないのです。少し動くと心臓がどきどきして氣力、体力とも衰えて來るのがわかりました。坂道をのぼりきらびっくり返つてころぶのです。船員らしい人が、浜

北部海岸に、ドラム缶に入った合成アルコールが流れついて岩の間にまつっていました。それから分けて来たアルコールをいつ死ぬかわからんとやけ酒に飲み、泣いていました。石垣の便郵局に勤めていたと云う人で、大浜と云う人でしたが、先に家族を台湾に疎開させていて台湾に連絡に行くと云う事で同じ船に乗つていた人が元氣を失なつて来ました。クオイノ君は明日死ぬぞ。自分が光りを失なつてゐる、君が死んだら喰うからな」と云いました。半分はほげますつもり、半分は本気です。

びっくりして大浜さんは氣力だけは持ち直したのですが、食糧の限界は来ているし、体力もつきてからうじて生きていると云うことの状態があとしばらく続こうものなら、それは人間殺すわけには行かないから、もう先に死ぬ人は喰つて、骨だけ残して葬るからと平氣で話すようになつてゐたのです。

四日目です。西の方の水平線から小さい飛行機が低空して来るので。おかしいぞと用心して見ていると日の丸のマークが見えたのです。クバの芯と交換して着けていたボロボロになつた着物を脱いで必死の思いで振り続けました。

二回目の旋回で、筒を落とし、その中に乾パンが入つていまし

た。連絡がついたのです。生還の望みが見出せたのです。みんな抱きあつて泣きました。三日後に、午前四時頃、ポンポン船の音がしました。掘立小屋の屋根にしていたクバの葉をはがし、それを燃やしてあいの火をあげ夜明けを待ちました。

石垣町役所から、米一袋積んで来て、そこでおかゆを作りました。鳥島に海鳥を探りに出かけたまま、そこに居残つた人々が五、

六名くらいの強い割合で元気なものが乗りこみました。八月の十日頃だったと記憶していますが、クバの芯、蟹節、びんづめの水を用意しておきました。所が石垣島にはたどり着いている頃の二日たつても何の音沙汰もありません。一升瓶に手紙を入れて、浜に流したりもしましたがもうだめだらうとあきらめしていました。

六名いる事が分っていたのですが、船はそこまでは今は行けんからとその人たちは残して来ました。

ずっとあとになって、その人たちは、台湾の漁船に救出され、台湾を経て、帰つて来たそうです。宮古関係の人は、私たち夫婦と私の甥、それにマソリキ船長と通称で呼ばれていた高吉さんと云う人がいて生還しましたが、この人は最近なくなりました。あの当時、船上で機銃弾をうけて負傷していました。

石垣にもどったのが八月の十九日だったと覚えてます。妻の実家が、白水にありましたが家族はマラリアでみな死んでいました。宮古の人で石垣の郵便局で勤めていた奥平さんの所で黒糖をもらいましたが、甥は猫が物を喰う様にいくらでもがぶがぶと喰べていました。九死に一生を得たと云う言葉がありますが、生と死を境にして生き残った体験は言葉では云いつくせない気がします。

難 遺 記 (5)

石垣町大川 宮 良 当 智 (六〇歳)

氣は早れど今日も延期、又延期と再三延期せし台灣疎開もいよいよ昭和二十年六月三十日夜九時頃船出する事になった。疎開人員はほとんどが婦女子と子供で、男は少数の六十歳以上である。六十歳未満も二、三人居つたが、多分戰闘に不適当の弱体者であったと思ふ。総數は百八十人位であった。

私は数え歳六十歳で満六十歳に足りなかつたが、老父母と近親の

老婆の付添で、又、総數の半分を有する宇大川班の班長として疎開する事になった。

妻と子供三人（五歳、八歳、十一歳）を棧橋より里奥の白水山に疎開、家に残し、前記三人の老人を守護し乗船したのである。妻子四人は次便より疎開すること、先行の私はそれまでに自活の道を講ずることにした。

棧橋には留守隊（六十歳未満の男子）の人や父が、可愛い妻子との別れを惜しみ、名を呼びあつておきました。その日の夕方、船は西表島船浮港に投錨、二晩停泊の後、七月二日の夜船浮港を出港したのである。

われら疎開者の船團（三十四、五屯のポンポン船二隻）は台湾へ直航、他の軍人乗りくみの船は与那國島経由台湾へむかう事になつた。一同潜水艦の襲撃を気に病みながら、一路無事安着するよう神に祈願しつつ一日千秋の想いで安着の日を待つていたのである。

ところが七月三日の午後二時頃、遠くに音と共に機影が近づいてくるのが発見された。大洋の真只中、防空壕もなければ身をかくす草むらもない。九死に一生の望みもうすぐ一同は絶望のふちに沈む。機影を見るのも気持ちが悪い。船員でふるえながらなりゆきにまかず以外にない。爆音が大きき聞えたと同時に機銃が乱射され、右側の老婆が一声叫んだままうらぶしてしまい、左側の児がやられ、前の人人が重傷を負いうなりだした。船側は機銃のため破壊され味噌瓶の味噌と血の混合汁ができ名状しがたい惨澹たるものであつた。私は無意識に船身をとびだしデッキにでるとそこにもすでに息を乱して絶命している者や、手首を取られてうめき、もだえてくるのが発見された。大洋の真只中、防空壕もなれば身をかくす草むらもない。九死に一生の望みもうすぐ一同は絶望のふちに沈む。機影を見るのも気持ちが悪い。船員でふるえながらなりゆきにまかず以外にない。爆音が大きき聞えたと同時に機銃が乱射され、右側の老婆が一声叫んだままうらぶしてしまい、左側の児がやられ、前の人人が重傷を負いうなりだした。船側は機銃のため破壊され味噌瓶の味噌と血の混合汁ができ名状しがたい惨澹たるものであつた。私は無意識に船身をとびだしデッキにでるとそこにもすでに息を乱して絶命している者や、手首を取られてうめき、もだえてくるのが発見された。大洋の真只中、防空壕もなれば身をかくす草むらもない。九死に一生の望みもうすぐ一同は絶望のふちに沈む。機影を見るのも気持ちが悪い。船員でふるえながらなりゆきにまかず以外にない。爆音が大きき聞えたと同時に機銃が乱射され、右側の老婆が一声叫んだままうらぶしてしまい、左側の児がやられ、前の人人が重傷を負いうなりだした。船側は機銃のため破壊され味噌瓶の味噌と血の混合汁ができ名状しがたい惨澹たるものであつた。私は無意識に船身をとびだしデッキにでるとそこにもすでに息を乱して絶命している者や、手首を取られてうめき、もだえて

いる者などがあちこちにいた。わたしは無意識のまま海中にとびこんだ。見ると、近くに船のダンブルの蓋に（一間四方位の板蓋）三、四人とりすがっている。わたしもその仲間入りをした。それらの人は船員とみて素人のわたしに「船に近寄ると機銃にやられる。船より遠く離れると大洋の真只中で助かるみ込みはない、だから船に近よらず離れず適當な距離で船を追い行くように」と注意をあたえてくれた。他の船はどうなつたかと見たらすぐに船火事を起こし、乗組員は皆デッキに出て火に追いまくられていた。船尾より船首へ次第に迫りこまれ、もはや行くべきところのない光景は全く絵で見た地獄の火あぶりそのままであった。とうとう一心丸は燃えつくして沈んでいった。生きながらの火葬、全く言いあらわしようのない残酷な姿であった。

二隻の船のうち一隻は船火事のすえ沈没、残りの一隻は機銃掃射で船は自由航行できず漂流、デッキには数多くの屍を見て事終わりりとみとつてか遠く飛び去つてしまつた。

生き残った友福丸より積みこんだ小さな伝馬船をおろし、一心丸から海中に飛びこみ泳いでいた人々を救いあげ、最後にわたしたちダンブル蓋組四、五人を救いあげた。飛行機は去つたが友福丸は機銃掃射で航行ができない。そこで乗組員を三組にわけて、機関係は機関修理に、一組は機銃跡の穴塞ぎに、わたしたち無芸組は海水の汲みだしに従事した。どうやら穴塞ぎもでき水の汲みだしも終えたが、機関はまだ動かない。しかたなく間に合わせの帆をつくり、できうる限り人事をつくして天命を待つ事になつた。その頃から激動の結果空腹をおぼえることがはなはだしくなつた。

そのようにしている間に、かなた遠くに小島がみえた。「呼鳴、あれはコーンヨー島だ。クバ島は近い」との船員の叫びに、一同九死に一生の望みを得たものの、まだ機関の修理ができず九分の不安を感じていた。

まもなく「アーモーティだした」という修理組の歎声があがり一同は「これでほんとに助かる」と大喜びであった。船は航行の自由を得てクバ島さして行く途中、小島のような大きな岩は低いすそのあたりに三人の男が手旗信号でよびかけている。「漂着している故、救助を乞う」との信号であった。「本船も空襲に会い、機関故障、幸うじてクバ島指して航行す。同島へきたれ」と返信し、幸うじてクバ島へ着いた。

後日クバ島へ来た彼ら三人は敗残の軍人の一員であった事がわかつた。

一船団二隻のうち一隻は船火事で沈没したため、同船より救助された人々は着のみ着のまま一物もない。幸うじて沈没を免れた一隻（宇大川班乗りくみの船）より大川班持參の米、味噌、その他の物資を陸上げした。大川班持參の米を供出して全員を賄うことにして、大口三食（朝晩）、一食につき米の量はわずかで沢山の草の葉の雜炊で飢を凌ぐ。米の量は二、三歳の幼児の食事後の飯茶碗に附着した飯粒に湯を注いだ時、茶碗の底に沈澱した米粒の量程でした。十四、五日程続いた共同炊事もついに解散することになり各自食物を漁りにおもむくことになった。クバ島は大洋の真只中、黒潮の中に屹立している小島で裾野は広大である。裾野の繞きは白砂で、そ

の先は深い海で漁はできない。山にはクバもあった。アダン葉もあつた。桑の木やガジュマルはあまりなかつた。百合が少々あつた。長命草も少々あつた。ミジナ、ヨモギ、野パンダマはなかつた。一番のご馳走はクバの若葉であった。断崖絶壁で素人には漁ができる。漁りに慣れた人は一人居つたが、外はだれ一人漁りをする者はいない。宿かりカニを三、四個拾つただけである。毒蛇もない。ヤモリ、その他の小動物も見あたらない。海辺の岩に井戸ヌマザムーナーが居たが、この小さい動物は行動が敏捷で衰弱して行動の鈍くなつた私たちには捕えることができなかつた。食物は草の葉だけであるが、その草もあまりない。見慣れない草葉は初め少量を毒味して異状がない時初めて多量食べる。浜カンシの実は食べる時は美味であったが、毒物と見えて下痢をもよおすので食べなかつた。アダン葉の若葉は八重山でよく食べるので、その若芽のついているとこの草を試食したが、カラクシテ（方言ビーサ）食べられない。最初の頃はクバも手頃のものを（自分の身長くらいのもの）切りとつていたが、終にはそれも切りつくしきおい高いクバを切らなければならぬようになつた。手頃のものは一回で切りとることができが、高いものは初め根を切り倒し二回目に若芽のところを切るため二重の仕事になる。次第に栄養不良のため力は脱け、体力は減じ高いクバも切れなくなり、草の実を食べるため段々と衰弱をきたしてきた。三十日頃から体力の弱い者から死亡しあつた。昨日は甲が死んだ。今日は乙が死んだ……。

私の同伴してきた老婆も死んだ。母も死んだ。父は栄養不良で体が動けない。寝起きができない。私も大分弱ってきて二、三町の道

あー、もう一助かつた」と不十分ながら腹づつみをうち二、三日中に

救助の船がくると喜びあい、それから元気百倍した。決死隊が川平に着いたことは後でわかつた。それより三日程経て救助船三隻がきた。将校も軍医もみえた。一同へいうには「今回は人員だけを救助にきた故荷物は船の都合でつんではならぬ。荷物を積みたい人は次回まで待つ様に」との事。だれも次回まで待つ者はいない。しかしながら元気な人々は全部でなくともいくぶんか持ちこみました。私は母を失い、老婆を亡くし、父は重体で人にオーブンされ乗船し、私も辛うじて乗船したので着のみ着のままであつた。軍の命令であったのか八重山へ帰島するまで誰一人終戦を知らす者はいなかつた。それ故帰島するまで又も空襲に出会いはしないかと心配であつた。私たち親子は二人共桟橋よりタンカで運ばれてなつかしき我が家へ帰つた。妻に子供三人計四人の内娘一人は元気で、三人はマラリアに悩まされ今日からやや元気になつたとの事であつた。栄養失調のため父は帰島後十八日目に死亡。私は七か月目によく歩く事ができた。初めの四か月間はオシメにより大小便の用をたしていった。疎開当時九十六斤の体がようやく歩けるようになり、隣りの酒屋のカンカンで計つたところ六十二斤に激減していた。おそらく病氣最高潮の時は半分に減つていたと思う。思えば冥土の玄関まで参り連よく門前払いをくらいい死に一生を得たことをこのうえなき幸いと思つています。再び戦争のなからん事を祈つてやみません。

程も休み休み歩くようになった。無人島上陸當時、多人数のため不衛生にならぬよう便所も一定の所に指定してあつたが身体衰弱のため必要がなくなつてしまつた。便通を覚えると一定の場所まで行きつかないうちに遂にでてしまう。やせ衰えた結果尻の穴に弾力性がない。弛みができて持ちこたえる力が無くなつたからだと思う。前記のように一心丸は船火事で沈没したため船乗込みの人員は刃物、金物其他一物もない。友福丸乗込み員の少數が持ちあわせていた刃物を交代で使用していた。船内で機銃で死亡した屍は、陸にあげたけれども鍼などの道具がないため、岩のかけに頭より大きい石を長方形に積みあげ下にクバの葉を敷き屍を並べその上からクバの葉をおおい、風にふきとぼされぬよう所々に石をおいた。全島山林であったため水には不自由しなかつた。日が経つにつれ皆が衰弱していくのでその対策を協議した結果、さいわい一行の中に船大工が一人居り、工兵隊の一部が居たので小舟をつくることにした。

身体の動ける者は全員、総動員で島を一周して難破船の残骸を拾い集めて板を取り、釘をぬぎ取って小舟を作り持ちあわせの布や着物で帆をつくり船員より決死隊を募つた。八重山でもよい。台湾でもよい。与那国でもよい。どこか連絡することにした。決死隊を送りだして安否を気づかつていて三、四日後飛行機の爆音が聞える。各自、木の礫みや岩陰に身をかくして空をのぞく。「日の丸」の飛行機である。手の舞い、足の踏むところを知らず、「日の丸」（無人島で一度空襲があつた。）落していったものをあけてみるとビスケット、コンペイ糖等であった。一同大喜びで早速分配、「あ

昭和二十年春、沖縄作戦が緊迫し、台湾区間の航行が遮断され、軍民需要物資の補給が途絶される。や兵团は長谷川少尉を長とする水軍隊を編成し沈没又は、座礁せる船舶を引上げ改修し、民間船を徵用、第一、第三、第五の千早丸、三隻を整え、私は第五千早丸の機関長として命を受けその任務につく。

五月二十五日午後八時右垣港を出港。西表島船浮港に一泊し、二十七日午後七時船浮港を出港、尖閣列島附近を迂回する航路を取り、二八日午後五時頃無事基隆港へ入港、物資を満載し、六月二十二日基隆港を出港、安全な航海で六月二十三日午後九時〇分無事右垣港に入港、それから二回目の出港にそなえ準備に取り掛かる。

旅団長より疎開者を台湾返乗船させる様命令が出る。
昭和二十年六月三十日午後八時、第一、第五千早丸に乗船。九時頃右垣港を出港。七月一日午前二時船浮港に入港、七月二日午後七時船浮港を出港。第一回目と同じ航路を取り七月三日の午後五時頃基隆港に入港する予定であった。風も静かで波もなく鏡の様な航海であり疎開者の仲からは楽しそうな歓声も聞えて来た。丁度午後二時頃疎開者の方が機関室に出来たり入り入りして居るので、かつてに機関室に入いらぬ様注意したら、敵機が近く近づいて居るがどうしたら良いだろうかと、あわてて出て行つた。まさかと思い、油差しの伊礼君に見て来る様に言つた。伊礼君は上にのぼつて行つたかと思うと顔色を変えて飛び下りて來た。間違いなく敵機との事である。私もあわてて上つて見たら、まだ見た事もない大きな飛行機が船の方向に飛んで來た。しまつたと思い機関室に引返すのと一緒だつた。

友軍の機銃の発射される音が聞えた。しかし八ミリの機銃と二四ミリでは話しにならない。やがて友軍の機銃の音もとだえ敵機の思いがままの機銃掃射である。これ以上船に居るとあぶないと思い、伊礼君にも後からついて来る様に言い敵機が機銃をあびせ行過ぎるのを待ち、機関を止め急いで船上にあがった。見れば機銃隊や疎開者が敵弾にたおれデッキは血の海と化して居た。二人はあわてて海に飛び込んだ。敵機は今度は私等に機銃をあびせて來た。そのたびに海にもぐり、ようやく難をのがれた。丁度三回目にあきらめたのか飛び去って行つた。船は無事かと見たら燃え始めて居た。火さえ消せば機関は大丈夫だから台湾迄は行ける、二人は力の限り船に向かつて泳いだ。船の近くまで来ると十四、五名位板にすがつて泳いで居た。

船の中で無事だったら疎開者が船尾につるして有る小天馬船に大せい乗り一人が綱を切ろうとして居た。今綱を切つたらあぶない。早く火から消して呉れる様に頼み二人は船首の方に廻り綱をしばつて、ようやく船上にはい上つた。見れば誰も火を消そうとして居ない。人影もなく火は風にあおられて大きく燃えさかつて居た。二人はあわてて火を消しに掛つた。しかし、もうおそかった。友軍の残して有る機銃弾に火がつき、爆発したからである。小天馬に乗つて居た疎開者も片方の綱を切つたらしく小天馬には人の影さえ見えなかつた。無我夢中で私等がさけんだのも聞こえなかつたのだろう。船尾はもう火の海となり船首の方に廻つたら宮城船長が機銃で手も足もやられ、たおれて居た。家族も乗つて居るので助ける為に力の限り敵機と戦つた事だろう。私に水を飲せて呉れと頼んだ。船尾に

も残さず救助して呉れる様頼み、私は機関整備に取り掛つた。しかし、機関も大部機銃でやられて居り、又疲労やひもじさの為思う様に整備がはかどらず、午後十時迄掛つても機関始動が出来ずこの調子なら、明日迄頑張つてみた所で見込みがないと思ひ船團長に機関整備員を、三時間位、寝かせて呉れる様頼んだ。船團長はびっくりして敵機は間違なく明日も来ると思うので、できるだけ頑張つてくれる様言つて居られたが、思いなおしたらしく機関の事は、君にまかすから、君の思うようにして呉れとの事で、三時間寝かせた。船團長はいっすいもせず、おかげをたかせ、六月四日の午前二時半頃起され、皆なおかげをたべて元気を出して頑張つて呉れる様力づけてくれた。それから皆は元氣を出して機関整備に、取り掛つた。初めからやりなおしでパイプ類をまげなおし石油タンクをデッキに上げ、それに長い棒をくくり付け四人掛けで、ポンプをおさせた。それが成功しバーナーが勢い良く吹き始めた。しめた、もう機関の始動は間違いないと思つた。丁度七時頃エンジンは、始動した。皆、大慶び船は敵機がこぬうちにと全速力で走つた。幸いその日は敵機にもあわず、九時半頃クバ島につきほつとした。

早速必要な物資は、陸揚しその日から無人島での苦しい生活が始つた。クバのしんや、長命草、色々名も知らない草の葉も食べた。一ヶ月過ぎる頃から皆が目に見えて衰弱して來た。せつかく助つたのに連絡も取れず無人島で命を落すのかと思うと何ともい様のない淋しさにうたれた。それから間もなくして、疎開者の中に岡本と言われる船大工さんが乗つて居られる事に気付き、早速その人を中心船を作り、連絡を取つた方が良いのではないかと云う事に話し

ミリでは話しにならない。やがて友軍の機銃の音もとだえ敵機の思いがままの機銃掃射である。これ以上船に居るとあぶないと思い、伊礼君にも後からついて来る様に言い敵機が機銃をあびせ行過ぎるのを待ち、機関を止め急いで船上にあがつた。見れば機銃隊や疎開者が敵弾にたおれデッキは血の海と化して居た。二人はあわてて海に飛び込んだ。敵機は今度は私等に機銃をあびせて來た。そのたびに海にもぐり、ようやく難をのがれた。丁度三回目にあきらめたのか飛び去つて行つた。船は無事かと見たら燃え始めて居た。火さえ消せば機関は大丈夫だから台湾迄は行ける、二人は力の限り船に向かつて泳いだ。船の近くまで来ると十四、五名位板にすがつて泳いで居た。

船の中で無事だったら疎開者が船尾につるして有る小天馬船に大せい乗り一人が綱を切ろうとして居た。今綱を切つたらあぶない。早く火から消して呉れる様に頼み二人は船首の方に廻り綱をしばつて、ようやく船上にはい上つた。見れば誰も火を消そうとして居ない。人影もなく火は風にあおられて大きく燃えさかつて居た。二人はあわてて火を消しに掛つた。しかし、もうおそかった。友軍の残して有る機銃弾に火がつき、爆発したからである。小天馬に乗つて居た疎開者も片方の綱を切つたらしく小天馬には人の影さえ見えなかつた。無我夢中で私等がさけんだのも聞こえなかつたのだろう。船尾はもう火の海となり船首の方に廻つたら宮城船長が機銃で手も足もやられ、たおれて居た。家族も乗つて居るので助ける為に力の限り敵機と戦つた事だろう。私に水を飲せて呉れと頼んだ。船尾に

も行けず困つて居ると、ダンブルの中から、人声が聞えた。見ると親子が助けを求めて居た。早速デッキに引き上げた。幸い水筒に水を持って居たので分けてもらひ船長に飲ませ、残りの水は水筒と一緒にほしい時に飲まれるようにとそばにおいてやつた。

船長は、涙を流しながらもう自分はだめだから残つて居る方々を助けて呉れる様頼んで居た。私等も泣けた。必ず助けに来るから、元気を出す様に力づけ、それから、マストを海になげそれに親子をつかませた。助けに来る迄はどんな事があつても、マストをはなさない様に注意し、伊礼君と二人海に飛び込み第一千早丸に泳ぎついだ。船團長は私を見るなり、良かった、良かったと喜んで呉れた。早速第一千早丸の美里君に小天馬をこがせ、救助に向かう。途中に美里君は船團長の喜びを話して呉れた。実は第一千早丸の仲間機関長が機銃でやられ機関を修理して動かせる人が居らず困つて居たとの事で有る。燃えて居る船のそばから、救助を始めた。今でも、忘れる事が出来ないのは、切れて落ちたつり便所につかまり、燃える船の下で助を求めて居る女子の声である。たれ落ちる石油を頭からかぶり、かみはみだれ見るだけでもひやつとした位である。美里君はあぶないから、よしたらと誓つて居たが、先ず行つて見て助けられない様なら、帰つて来るからと泳いで行き、ようやくの思いで便所を引張り出し、助ける事が出来た。その方も今は、良き母親となつて居られる事だろう。

火は船首まで燃えひろがり、とうとう船長を助け出す事は出来なかつた。心から船と共になつた船長初め、機銃隊、疎開者のめいふくを折る者である。二回目の救助からは、美里君や、伊礼君に一人

がまとまり、皆が協力して、座礁船から板や釘などを集めた。岡本さんも、船造りに頑張り、やがて、船も見事に出来上つた。疎開者の中には、船を乗られた経験者も居られたので、どこに連絡を取れば良いかとの事で打ち合わせがなされた。水軍隊からは、私と上原、美里の三人が代表として行つた。しかし疎開者の代表の方々は、台湾が近いから台湾に行つた方が良いとの事である。

私等はクバ島近海は潮流がはげしいので、とうてい台湾には、むづかしい。石垣島にとれば、流されても宮古島に連絡取れるかも知れないと話したが、まとまらず、私等は引きあげた。それから二日目、どうしても水軍隊でなければ連絡は取れないから頼むとの事である。しかし、今船を離れて行くのは、死に行く様なものであり、どうしたら良いかと迷つた。疎開者の方々を見れば、皆衰弱し後二十口位も持ちそうもない。もしわれわれに徳があれば連絡取れるかも知れない。皆の為めにやつて見ようとの事で話がまとまり、早速船に必要な道具の準備、帆は疎開者の中から反物を出し合つて造つもらつた。連絡者は、山内軍曹、上原龟太郎、柴野川盛長、伊礼良精、伊礼正徳、美里勇吉兄弟、私の八名の者が、爪と髪の毛を切り、紙に包み、それに名前を記入して、もし連絡が取れずして、島に居る者が助かれれば必ず此の紙包を家族の者に渡して呉れる様に頼んだ。疎開者の中からこの着物は、自分の祖母さんが八八歳米寿の祝に、着けられたカリーの着物であるからと赤い着物をちぎられ、これを鉢巻にして必ず無事に連絡を取り、皆の命をすくつて呉れとの事で身も引きしまり勇気が出た。

八月十二日午後五時頃、皆に見送られ八重山むけ出発した。その

晩は順風に乗り、そうとうの速さで走った。十三日は朝から風もなく帆を下し、一生懸命こいだ。途中三回も敵機に会い、そのたびに船をかえしその下にかくれた。丁度三度目の時、敵機が低空でやつてきた。あわてて船をかえしたが下にかくれるのもまに合はず、もう最後だとあきらめた。みなぎんちようした顔である。珍らしい事には、飛行機はそのまま通り過ぎて行った。みなはほっとした。船をおこし水をくみすて、又こいだ。ちょうど度二時頃雲間から高い山が二つ見えた。富古には高い山がないので、あれは間違なく石垣のオモト岳である。皆踊り上って喜んだ。その時の何とも云えない嬉しさは、連絡を取つた者でなければ、あじわえないだろう。ひじさも苦しさも吹き飛んで急に元気が出た。皆の目が輝き、漕ぐ腕にも力が入つた。それから力の限り漕いだ。

八月十四日朝になると平久保より屋良部岳迄大きく見えた。もうひとりいきだ頑張れと、掛け声と一緒に漕いだ、午後七時頃無事に川平崎の北の湾に船はついた。だからともなく、島についたぞ、ばんざいと皆ながだき合つて涙を流して喜んだ。しかしつかれててだけ一人歩ける者は居らず、はって上つた。砂浜の少し上つた所にバンザクロの実がたくさんみのつて居た。皆な、それをむさぼり喰つた。ようやく腹が満つと歩ける様になり、九時半頃川平の部隊にく。早速部隊から旅団に、連絡旅団から台湾航空隊に連絡され、それから友軍機が飛び、救助船が出され、無事一八〇名余の疎開者が助り帰つて来た。思えばクバ島を出て五十時間余の苦しい連絡の船出であった。もし力及ばず連絡取れなかつたとしたら、一八〇余名の皆なが無人島の土となつて居つた事だらう。ただ神の加護を感謝

し忘れる事の出来ない想い出を閉じる。

三、特設工兵隊の食糧事情

石垣町字石垣 大浜嘉市（三四歳）

軍隊生活中一日たりともひもじい想いから解放されたことはありませんでした。それもそのはずで口を大きくあけると一度で食べてしまえるほどの量しか与えられなかつたわけですから。

私は昭和二十年の四月一日入隊しました。白保飛行場での弾痕修理が主な任務でしたが鉄カブトはもちろん靴さえも与えられず、ほとんど素足のままであつた。敵機がくるとショベルを頭にかぶせたり、ドラム籠の切れっぱしを頭にのせてしゃがむなど今考へると滑稽なことをしていたものです。そんな状態の中で食糧事情も悪化し、逃亡して食物を求めて歩いたものです。以前は農業組合が農民から供出として集めたものを受けとるという仕事でしたが、敵機來襲がはげしくなると農業組合も消滅してしまい、自分で農家を廻つて野菜を買わなければならなくなりました。それで時間も午前八時から夕方まで認められました。しかし、いくら食糧産を奨励しても爆弾の降るなかで野菜など栽培する者はいるはずもなく、結局野生のものを集めて帰る以外に方法はないので、ヌーハンミズナー、ターケブ、パパイヤなどを取つて帰るといったことをしました。御飯は少ないからせめて野菜でも多く集めようと努力しました。

したがどうにもなりませんでした。その係になつて私は一面で助かつたこともありました。それは毎日家族のところへ行けだし、時には畑仕事も少々できたからです。時々は夕方隊へ帰る時に米やおにぎりをかくしもつて同僚に与えるなどのこともしました。しかしそんな事もありしまがきびしく思うようにできませんでした。私たちのほかに漁撈班も編成されていました。漁師出身の隊員を集め近くの海で魚を取らせ、それを隊へ持つてきて食事にしましたが、大きい生きのよい魚は上官がとりあげ、私たちには匂いをさせる程度で魚の骨さえ見当らないのが常でした。とにかくよいものはすべて上官のところで姿を消してしまつたのです。

川平の西垣さんなどはイエブー（海へび）取りを命ぜられて毎日屋良部崎あたりまで行かされたということでした。大漁の日もあるという話でしたが、一度も私たちの食膳には姿をみせませんでした。そのように自給自足の状態でしたが「米」だけはどうにもなりませんでした。ところが米が全くなかったという点ではなく、長期戦に備えてということなのかオモト岳（五三五メートル）の山頂に米俵を運搬させられたこともありました。一般に食糧事情はとてもひどいもので、特に病人などは栄養失調に加えてマラリアの熱ですかねますます体力は弱っていくばかりで死亡者もたくさんでました。

四、小浜島における朝鮮人の生活

小浜島 仲原清徳（六十歳）

わたしたちが飛行場建設に従事されたり、島の人たちが特設工兵隊に召集されていく頃、昭和十九年から昭和二十年にかけては小浜島にも軍隊が配属されてきました。

旅井部隊といつていました。後では引野部隊になつたのですが、その隊長は終戦になるならないうちに逃亡しました。その部隊の陣地構築をしに朝鮮人が五〇名ぐらい小浜にきていました。彼らの仕事は、部隊の兵舎造りや特攻艇（ベニヤ板で軽くつくられ、百キロの爆雷をつみ、自動車用のエンジンで時速三〇—四〇ノットの高速力で敵艦船に体あたりするようにつくられた小船）の隠匿壕作りなどでした。彼らは、ダイナマイトを使い、ツルハシ、鍬をふらされ、土砂をモッコでかつきだすなど一日中働かされていました。東表（あひるだい）お嶽の下の壕、アカツチャ端の壕などは朝鮮人を使ってつくりしたものです。それから西田原の海岸線、そこはウンダル木（トカナチ）がおい茂っているのでそこに水路をつくり、特攻艇をかくす所としてつくつてありました。資材はほとんど現地供出でした。

きれいにおい茂っていた大嶽の松林、ユクニの松など、それに宮良松千代さんの「やらぶ」、大久家の東表のやらぶ林などみな切り倒されました。各家の福木もたおされ、東表の壕、兵舎などにつかわれました。あの松はほんとにきれいな素ばらしい枝ぶりでしたが、政府はこれに對して今まで何の補償もしてないようです。それからお嶽の木は朝鮮人に切りたおさせました。島の人々はお嶽の木をみると神の罰があるというので、神行事以外はお嶽にも入らないという状態ですが、軍は朝鮮人をお嶽に入れ、木を切りたお

させたのです。ぼちがあたつて死んでもよいと想えていたのだろうか。危険でいやなものはみな朝鮮人にさせたようです。ほんとうにかわいそうでした。また、ナクレー（地名）とニシンドに慰安所がありました。それは上官がとまるところとしてつくったようです。各家庭から「疊二枚だせ」と軍命がだされ、学校の床板もはぎつていて慰安所を完成したようです。軍隊はちゃんととした兵舎があったのですが、朝鮮人は民家を借りて生活していました。長田、名若場慶名、野底、慶田城、宇保氏宅などでした。

一九四五年（昭和二十年）になると毎日のように空襲もはげしくなり、離島への物資の輸送は困難になり、兵隊も食糧がなくなつたのでしよう、民家に食を乞う朝鮮人と兵隊のようすがあちこちでみつけられました。芋の煮えるまでジッと待っていて、「ウム食べれいや」といってわけあたえると喜んで帰るのでした。

朝鮮人はニンニク、グース（唐がらし）を生のままでもよく食べました。軍が申しわけ程度に金をはらつて半強制的に没収してきた家畜は朝鮮人が殺すようになつていて牛を殺した朝鮮人は肝臟をとりだしして生のままでも食べていました。きたないと思いましたが、よく考えてみるとどうせ部隊にいつてもろくに自分たちには食べられないから内臓だけでもと思い急いでたべただろうと思いました。小浜にきていた朝鮮人はみな立派な人たちでした。またよく米や豆の収穫を手伝つてくれました。わたしの家には五、六人の朝鮮人がよくきました。もちろん食物ほしさにだろうが、とくに朴さんと金さんは親しくしていました。わたしの家族の者がマラリアにか

かり、米の収穫ができなかつた時などアカヤーの田から六百斤ほども米を収穫してくれ、ほんとに助けられました。わたくしは、一町二反の米をつくつていましたが、一町歩はマラリアのため収穫出しきずそのままですてしましました。このようなことがあちこちにありました。テンナ田原の内間さんの田もそのまま収穫もせずしてありました。マラリアにかかるのは十指で数えあげられるほどで、ほとんどの家がマラリアで農作物の収穫などできる状態ではありませんでした。それでもせつかの農作物をするわけにはいかないというわけで、マラリアは周期的に発熱してふるえるわけですが、その発熱しない時間を利用して田に降りて収穫をしませました。家に帰るころは高熱をだしぶるぶるふるえて死にかかった人もいました。

四、五月頃になるとほとんどの家がマラリアで寝ていて惨たんたるものでした。マコン山、ジロク山のあぶ（どうくつの意）に避難した人々はほとんど死にました。西里兎、外間ヤマさんの家族は全滅しました。浦崎さんの所は同じ日に夫婦が死亡するという毎日悲報が伝わり、墓場は死体の腐敗する臭気がただよう島とかわっていました。こういう中で朝鮮人も島をひきあげていました。六月だったと記憶しています。これから台湾へ行くということでした。しかし空襲はあいかわらずはげしく、はたして無事に台湾へたりつき自分たちの国まで帰ることができたかどうかわかりません。「いろいろとありがとうございました」と頭をさげて別れた姿が今でもあります。

五、婦人の生活

メモ帳より

西表島祖納 古見タケノ（二十五歳）

夫は台灣で徴兵、その後郷里西表の祖納に帰り子供三人をかかえて生活するある母親の生活を、当時のメモ帳から語つてもらおう。

古見タケノ 当時（二十五歳） 悅子 当時（七歳）

典子 当時（五歳） 用志雄 当時（三歳）

八月二十一日 日婦基金もうけ、タデ草（コシダ）取り。

出勤者、古見タケノ、富良マウシ、西表ハツ子、西表カメ、波照間マイチ、富良モモ子、富里マサ子、富良ハル子以上八名。欠勤者、西表マワツ、富良クナリ、慶田城クマヤ、崎山モウシ、真謝クヤマ、玉代勢ヒサ、古見オナヒト、古見光子、古見文子、富良ヤス子、大浜ナツ子、宮城節子、以上一四名。一人あたり、五〇銭の過疎金として徴収計六円七五銭

婦人部目標額、千五百円以上。

昭和十八年八月八日 那覇競技大会選手出迎をなし後、常会をなす。

祖納一班～五班 星立一班～三班の貯金状況

貯金額三一、四六八〇〇銭

昭和十八年八月十六日

軍部慰問ノ為、各戸ヨリモチ米五合徵収。

（二班）波照間マイチ、富良ヤス、富良ハル子、富里マサ子、富良クヤマ、山田オナリ、古見オナヒト、西表カメ、古見オナリ、富良

二班班員、二十二名の氏名、生年月日
古見オナリ 明治十九年 二月一一日

古見オナヒト タクニミ・一二・一二
西表マワツ タクニミ・三・二十一
西表カメ タクニミ・六・一〇
玉代勢ヒサ タクニミ・一二・一三
山田オナリ タクニミ・七・二五
富良クヤマ タクニミ・八・一〇
慶田城クヤマ タクニミ・一〇月一五日
宮良マウシ ククニミ・四・二六
崎山モウシ ククニミ・五・二九
眞謝クヤマ ククニミ・七・二五
波照間マイチ ククニミ・八・一〇
宮良モモ ククニミ・九・二一
宮里政子 ククニミ・三・二一
官良安子 大正元・九・一二
官良春子 明治四三・二・二〇
大浜ナツ 大正五・三
西表ハツ子 大正五・五・三〇
古見文子 ククニミ・六・二三
吉見光子 大正八年
宮城節子 大正八年
古見タケノ ククニミ・七年八月三一日
八月二十六日 軍部慰問の為餅つき準備をなし二十七日
九月五日夜 慰問へ行く。

婦人資金集金の為幹部会をなす。会長宅にて。
八月分貯蓄報告、郵便貯金簿 一〇円〇〇銭 簡易保険
八円九〇銭 計一八円九〇銭

十月一日 警察部長歓迎会の為料理をなす。

十月六日夜

節祭の準備をなす。

十月九日

節祭をなし、来賓の接待をなす。

十月十日

節祭終わりの祝賀をなす。

十月十一日

防空常会に参加し、後、会館の祝をなす。

十月十二日

第二班の甘藷掘り作業をなし、夜、婦人会幹部一同の親睦会をなす、一班から五班までの貯金の微集状況報告、

十月二十一日

日婦鍊成会講座、祖納会館に於て

一、敬礼 一、開会 一、国民儀礼 一、国歌奉唱

一、会員奉読 一、郡支部長あいさつ

一、講演 海行かば奉唱

十月二十六日

応召兵演習の際慰問

秋季清潔検査

九月五日夜

軍部へ奉仕作業、古見タケノ、官良春子。

十二月十日 古見文子
十一日 古見タケノ

十二月十三日 ミダラ排水工事
十四日 ミダラ排水工事

十二月分貯金 三拾九円、十一月二十七円

十二月十五日

星立部落の工事に行く。

昭和十九年一月一日

午後より敬老会、慰安会の料理準備をなす。

一月一日

敬老会慰安会をなし、幹部一同接待をなす。

一月六日

砂川巡回送別会をなし、引続き幹部会をなす。

一月八日

一区(内離島)へ戦闘演習見学に行き、午後還暦祝の準備をする。

一月九日

還暦祝をなす。一月分貯金 三拾二円

一月十一日、十二日 エビ取り

一月十三日

土地改良工事に行く。

一月二十八日

軍部奉仕米つき作業、出労者・山田オナリ、慶田城クヤマ、西表

礼式をなす。

十二月九日

大詔奉戴日、午前六時白浜部落へ行軍をなし、西表神社にて奉誦

十月九日

よただ橋修理に出労

十二月六日

国民学校にて部落常会をなす。

十二月八日

村葬を行なう。

十二月一日

大詔奉戴日、午前六時白浜部落へ行軍をなし、西表神社にて奉誦

礼式をなす。

十二月九日

マハツ、波照間マイチ、宮良クヤマ、崎山モウシ、宮里政子、宮良ヤス子大浜ナツ子、西表ハツ子、以上十一名

二月六日

一区へ奉仕作業に行く。

二月八日

早朝防空訓練をなし、部落常会をなす。

二月分貯金、拾八円五〇銭、三日分貯金

郵便貯金内訳

古見用志雄（四才）	古見ノリ子	悦子は学校で
六月 五〇、〇〇	一〇、〇〇	貯金している。
七月 一〇、〇〇	一〇、〇〇	
八月 一〇、〇〇	一八、〇〇	
九月 一〇、〇〇	一〇、〇〇	
十月 一〇、〇〇	〇、五〇	
十一月 五、〇〇	二、〇〇	
十二月		
一月 二、〇〇	二、〇〇	
二月 一、〇〇	一、〇〇	
三月 ○、○〇	○、○〇	
昭和拾八年度貯蓄額（タケノ）		
四月 拾五円	一月 貯拾七円	
五月 四拾七円二〇銭	一二 參拾九円	
六 九拾九円	一 參拾貳円	
七 五拾四円五〇銭	二 拾八円五〇銭	

八 拾円	三 武拾四円
九 武拾円	計 四百拾九円武拾銭
一〇 參拾參円	

十九年八月二十二日
なつかしの西表仲良（白浜）港を後に、台湾へ疎開す。午後八時
与那国に安着す。

八月二十五日

特別金開封、宮城五〇銭 仲村五〇銭 本原一円 大盛五〇銭
東浜五〇銭 那良伊三〇銭 孫秀一円三〇銭

六、漁民の生活苦

石垣町字登野城 玉城キヌ（三歳）

私の家はくり舟漁業を営む零細な漁民で、父は多勢の家族をかかえて人一ぱい働いてどうにか暮しをたてていた。

その父も若死し（昭和十四年）、あとは母と年老いた祖父が残され家族の生活をささえていた。

私は十九歳で（昭和十五年）南洋諸島のトラック島へ出稼ぎに渡った。当時トラック島では一ヶ月働いて三〇円（石垣島の賃金は一日四〇銭）の稼ぎがあった。島の生活は働けば働くだけ現金収入があがり、私たち貧乏人にとつて大変魅力があった。

私はそこで十六年に結婚した。夫は働きもので生活も安定し、十二坪程のトタン屋で、十八年九月には男の子が生れた。

は農家の主婦たちが私たちの「るのをまちのぞみ、サツマイモ、モミなどと物々交換してくれた。

昭和十九年十月十二日の石垣島空襲以来敵機の来襲は日増しにはげしくなり、爆弾はあたりからまわらず海中にも投下された。

そんな時わずか十二歳の弟は身の危険もかえりみず、海中にとびこみ、浮き上がりった魚を拾い集めた。これまでどうにか働いていた母もマラリアにたおれ、私は病氣の家族をかかえて、弟だけが唯一の頼りなので、そんな弟を止めることもできず、丘にあがつてくる弟の姿をみるとほつと胸をなでおろしたもののが無事を喜びたわゆとりもなく、大浜部落へ急いだ。

そのころは農家の人は多く空襲をのがれて、畑小屋、山ごやに避難していたのでやつとのことで避難小屋をさがし当て、食糧（イモ、モミ）と交換し、大急ぎで引きかえした。

病人の食事もイモばかりで、だんだんすい弱していくし、わずかのモミを交換してもらった。一升びんに入れ、棒切れでつづいて玄米にし、おかゆにして与えられる日は涙が出る程うれしかったものです。

そんなんある日いつものように物々交換に行く途中巡査に「おい、とまれ、どこへ行くのか」と呼びとめられかどこの魚をみて「ヤミに行くのだな、公定価格はわかるか、すぐもどれ」と引きかえされた。

しかし、そのままでは明日の食物がない、おめおめ引き返えすわけにもいかない、燃えたぎる怒りをかみころしながら良策はないものかとしばらく歩いていたら、軍のトラックがやってきたのでうまい頭にのせて大浜部落まで歩いて食糧と交換を行った。大浜部落で

当時トラック島でも「隣組」が活発に活動し、やれ保険の債券だのといって、汗水ながら稼いだ金がまきあげられていった。男の子が生まれて兵隊保険がかけられ、「二〇円、十円、七円、五円、三円」の債券割り当てがあり、私たちは、できるだけ少ない方をとりたいためにくじ引きで、割り当てを決めていた。そのうちに住宅もわずか七〇円で軍に買いあげられ、おまけに台灣銀行発行の小切手で支払われて、現金を手にすることはできなかった。（今日まで何の補償もない。）

一九四四年（昭和十九年）、一月強制引揚げとなり、夫を残して「ロープ一本、懐中電燈一個、ナイフ一本、カツオ節一本」という携帯用品をもって、やつとの思いいで二月に生まれ故郷の石垣島にたどりついた。

私は生後七か月のむすこと一緒に私の実家にころがりこんだ。その頃、すでに弟は結婚し、妻子と家族（祖母、母、第二人、妹二人おばと子供計十名）を残して特設工兵隊に入隊していた。私たち親子を加えて十二名のものが小さなかやぶきの家でひしめいていた。

私たち漁民には、田畠もなく、唯一の働き手は、兵隊にとられるし、悪性マラリアで家族のもの殆んどが寝ついてしまう。生活は生き地獄さながらのひさんなものであった。

当時十二歳の弟は唯一の働き手として、朝早く起きて、前の海（家から一キロ以内の内海）にかけ、もぐりをしたり、小魚を釣つて生活をさせていた。

私と母は弟の帰えりを祈りながら待ち、四、五斤の魚をかごに入れて生活をさせていた。

私と母は弟の帰えりを祈りながら待ち、四、五斤の魚をかごに入れて生活をさせていた。